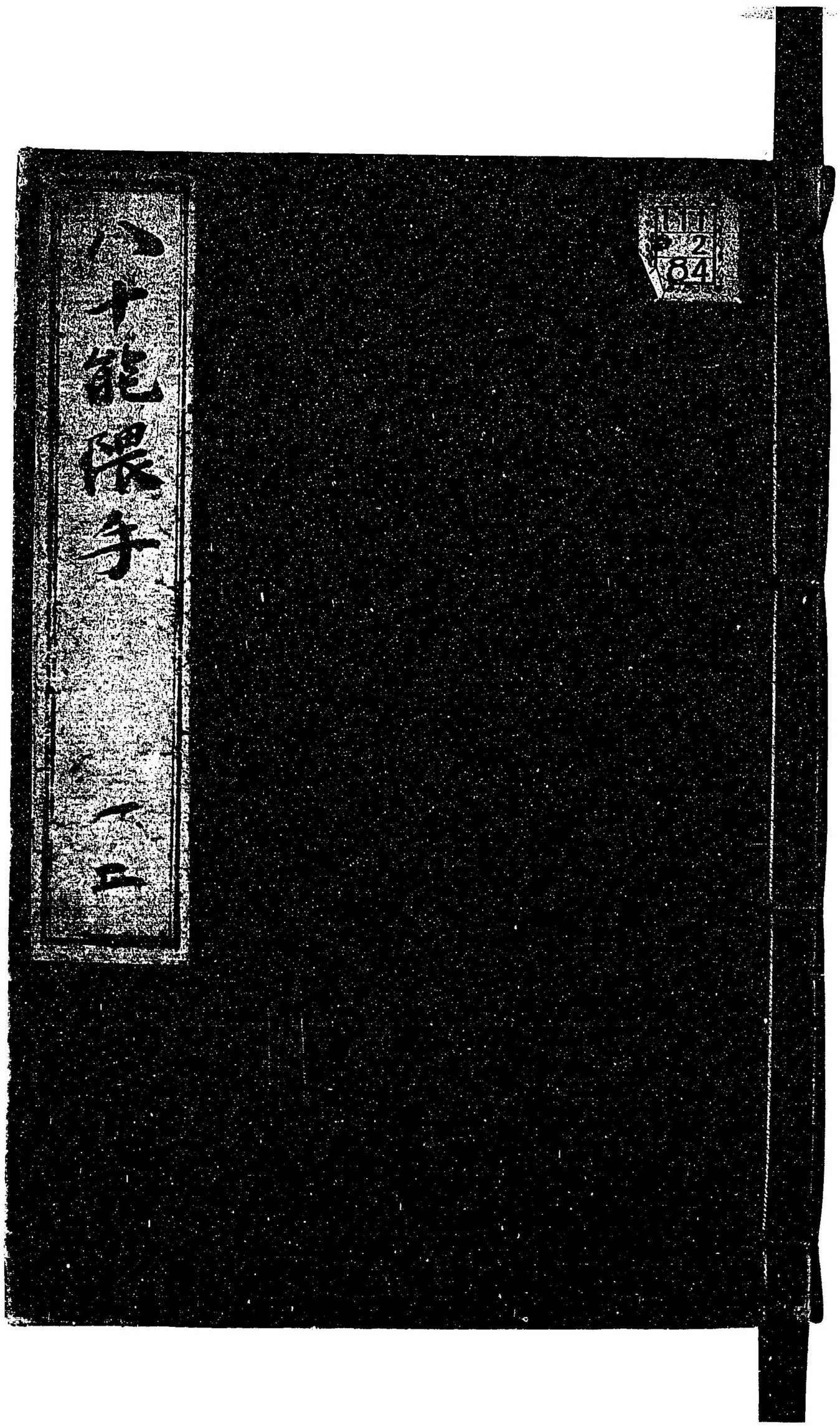


014684-001-2

111-84

八十能隈手

矢野　玄道／著

1冊

M7

ABB-1119

八十能限手

777
84

東京圖書館
四
門 類 番 架 冊

夜曾逈久萬泥一之巻

門　伊豫国　常磐井精戈　仝

平朝臣玄道敬述

人　伊豫国　木野戸勝隆　校

凡そ我人い更なかり。世(ヨ)間小ゐのとと有もる。萬(ヨロヅノモノ)物ゐ出來(イデク)る根本(モト)を。蓋(ケダシ)高天原(タカアマハラ)謂もる北極紫微宮。小大坐ますをも恐なり。天之御中主大神。高皇産靈大神。神皇産靈大神と申を。三柱ゐ別(コトアマツ)天神。まと神祖(カブロ)神伊邪那岐大神。神伊邪那美大神。それ宇都(ウヅノ)御子とまに。天ツ日(ヒノミ)御国(クニ)を統(シロシ)御(ン)坐(ス)天照日大御神。月国を統(レロシ)御(ン)

免に。月夜見ノ大神。はと風火金水土ゐ。五元ノ大神。ま
ゐ産土神。氏神等の大御恩頼ゐ因ゐて。生々化々
いぢる物ゐて。そゞの間ゐも。人を生をし生る物の
中ゐ。殊更ゐ靈物を。上古をゐいひおぎゝて。生涯
はいふも更よて。それ後ノ世までも。將その産土神。
氏神たちを。御周旋を蒙るおとゐおもゐゐける。
ちて上ゐ申せる。高天原ゐる。三柱別天神等ハ。無
始をて。天地日月のいよゞ無ゐし。上ゐ世よゐ。御
坐して。天地日月を初めて。有もる千萬世界を。皆
盡くゐ。此大神れ御恩頼ゐよりて生化いでゝ。伊
邪那岐命。伊邪那美命二柱大神ゐ大詔依して。此
大地を初めて。諸國ゐ造固ちせ賜ひ。ちて夫妻をお
ゞの道を初め賜ひて。國の八十國。まゝ島の八十
嶋をも。八百萬神等をも。生賜ひて。萬の國島。萬れ
事物。某々れ大神等ゐ。みれ事依し賜ひて。造化の
功を爲さゝめ賜ひ。いや後よ。萬國の大君主ゐ生
むと詔ひて。天照坐大御神を。須佐之男大神。又御
名ゐ月夜見大神とを生奉ゐ賜ひて。天照大御神

をぞ。天ヲ日、御国ヲ小。須佐之男、大神ヲ。月夜見、国を。統シ
御ラをべく詔別賜ひ。其オホミ大御イヅ徳業ハ。盡く譲ア奉り
給ひて。伊邪那岐、大神の現ウツシミ御身ヲ。日、少宮ワカミヤ小。伊邪
那美、大神の現御身ヲ。月夜見、国小入らせ給ひ。二
柱、大神をめ小。かく離て大坐しおヽも。大御靈を
かくて伊邪那美、大神。月夜見、大神も共よ。天
一大一の国小も坐サキハヒよし。師説小審カあア。
天之御中主、大神ハ。吾カ先師の説小。玄家よハ上
皇大一。まと上々大一とめ傳へ奉ア。皇産靈、大神

をぞ。盤古眞王。元始天尊と申し傳へ。天竺国小
てハ。摩醯首羅天とも。大梵自在天神あども申
傳へ。提婆論よ。所アラユル有一切。有名非命、物。皆従テ自在
天ニ生ジ。従テ自在天ニ滅スとも。摩陀羅論師、説小。自在天ハ。
造作ストハ衆生ヲ。那羅延、言。我レ造ル一切物ヲ。我レ於テ一切衆生
中ニ最勝レリ。我レ生ス一切世間、有命無命、物ヲ。云々。まと本
生安茶論師、説小。本無日、月星辰及地。唯有大水。
時ニ大一安茶生デ如レ雞子。周匝金色。時熟破テ爲ル二段ト。一
段ハ在テ上ニ作リ天ヲ。一段ハ在テ下ニ作ル地ヲ。彼ノ二中間ニ生ス梵天ヲ。名ク

一切衆祖公作二一切有命無命物一又三論音義ふ。
大自在天。能生二萬物一。萬物若レ滅。還二歸本天一。故云二自
在一。若レ瞋則四生皆苦。喜則六道咸樂。まと倶舎論
音義ふ。那羅延天。那羅此云二爲人一。延那此云二生本一。
卽是大梵王也。外道謂一切人皆從二梵王一生レ。故名二
人生本一也。まと商羯羅天とも。毘紐天とも。婆藪數
天。まと韋紐天とも。伊邪那天。まと世主天。まと
魯達羅天などをも。稱奉レ。まと麼羅とめ申し。
其后神を毘摩羅天を白して。御靈實を陰陽右

ふまにおと。唐玄奘ゲ傳ふ。彼ゲ印度の諸國な
周遊をる所ふ。至二劫比他國一。俗事二自在天一。其精舍
者。高百餘尺。中有二天根一。形極偉大。謂諸有趣由之
而生。王民全敬レ。不レ爲二鄙恥一。諸國天祠。率置二此形一。大
都異道。乃有二百數一。中所レ貴者。自在爲レ多といひ。西
域記ふ。健馱羅国の處ふ。跋虜沙城東北五十餘
里至二崇山一。山有二青石一。大自在天夫婦像。毘摩羅天
女也。聞二諸土俗一曰。此天像者。自然有也。靈異既多。
祈禱亦衆レ云々。其有願見二天神形一者。至誠無貳。絶

食ヲ七日ニ或ハ有リ得ル見ル。求願多ク遂ル山下ニ有大自在天ノ祠。
を有れバ。后神も在ス。是まゝ皇産靈ノ大神の男
女二神ある小符アへるよし。まゝ同記小。印度諸
国小。大自在天ノ祠の多き趣を記せる。其ノ數幾千
ナクて。尊崇をハ趣あど。詳小赤縣太古傳。印度藏志
小説トキ明ちれるを見バべし。まゝ古川辰ガ東遊雜記小。陸奥ノ国某
見るべし。陰陽石の事ハ。陰陽神石ノ圖ヨ因て
郡の。巻ノ堀村金ノ盛ノ社ノ神體ヒ。數千年
を經るる鋿の男根の形ヨて。陰石も副ヒて坐ヲ
といひ。筆ヒ儘ヲ。遠江ノ国事任ノ社。常陸ノ国弓削ノ社

の神體も。陰陽石ヲと記し。雲根志ヲ。大井川ノ
川上。蒙品川。まゝ不盡川。安部川小も。陰陽石多
く。駒ガ嶽小大ちる陽石多ゥヲ。近江石部の山小
陰石多く。大和ちる天道羅石山まも。大石あり
かどもヒて皇産靈ノ大神の御社を。本官を始て。
云ヲ。
畿内の諸国小多ちるを。天之御中主ノ大神を。崇ヒ
祭れる御社の無ないハ。誰も訝しむとある故。
或ル説小。大和ノ国の城下ノ郡かる。服部神社小や坐
ちむを云ゐる。實小然るゐくかむ。ばゝ世小天
一神と申て祀れるぞ。此ノ大神かちむと思ふ由ノ
にのりて。別小記おける物あヲ。まゝ眞俗交談記
小。參議資實語テ云。

天子毎レ霄令レ拜二北辰一。然陰夜不レ露之故二拜一レ彼畫圖星宿ヲ御ス也。御指合之時。被レ召伯輩ヲ爲二御容一。代ト令勤二此事一ヲ給フ。若后妃令レ勤二其御代一給フ事モ有ヤいひ。永正記ヨ。詞官等向二北座一方北斗出現方也。儀ホてぞ有ケむ。ちて中昔よめ。方違方塞方忌かどいふハ。天一神金神の在ス方を避るよとぞ。大和物語ヨ。かくれふとがれバおよひたえかむまうでぬと宣ヲけれバ云と。源氏物語箒木巻ホ。おとよひ中神ふとがヲて。侍ヲけりといひ。枕冊子ホ。おとよひ方のふとがれだ。違ヲかむ往く。後撰集ホ。方ふるがヲて。たのヲホまのるとて。藤原有文朝臣カ。と時も。見給だ戀しき。君をおきて。河内やしや幾日。外ホ寢ぬらむ。はとかと塞ごのヲとて。まとおの來ざヲけれバ。河ふおとの。このとふとがヲて。君來ばバ。思ふ心たのふぞうれぞ。」

ちて天照レ坐ス大御神ハ。大詔のまふくゝをおとたゝ小天日御國を治看ヒ。大君皇と成賜ひ。須佐之男大神も。永く月夜見國を治看ヒ。大君と成坐して。有ラもる千萬國ホ。御恩賴を幸ヲ賜ふ御事ホを。此大地ハ。天ツ日御國を知看ヒ。大君皇と。月の國を治看ヒ大君主と。御宇氣比の間ホ生坐せる。正哉吾勝勝速日天忍穗耳大神と申レ奉る。大神の皇太子。天津日高日子火邇々藝命と申をを。天照大御神。高皇産靈大神御量ヨ因ヲ。天下の大君と。御

定め有(ア)て。天降し賜(タ)ふ。故(カレ)。天神壽詞。大祓詞を始めて。諸(モロ)詔詞よ。高天原(タカマノハラ)。神留(カムヅマリ)坐(マス)て。皇親神漏岐(スメカムロギ)。神漏美(カムロミ)の命(ミコト)以(モチ)て。八百萬の神(カミ)たちを。神集(カムツド)へ小集へ賜ひ。神謀(カムハカ)ふ小謀ふ賜ひて。我が皇美麻命を。豐葦原の水穗國を。安國と平けく治(シロシメサ)省と。事依(コヨサ)し奉(マツ)きと見え。續日本後紀ある。古歌小茜刺(アカネサ)し。天照る圀の。日宮は。日知ふの御子ぞ。久方の天梯立(アメノハシダテ)ふ。みおもこ。天降(アモリ)坐しゝ。云々」とよめるも。神語小因ふて。詠(ヨミ)傳へゝる。正(マサ)に古語(フルコト)小ぞ有ける。此らい委しき

師說有れど。
今た擧(アゲ)ず。
高天原とい。元北極紫微宮邊(アタリ)を申して。後小た日。大御神の治しめせる。天ツ日。御圀をも申しぱよと轉(カヘ)てい。遙々(ハロバロ)小見霽(ミハル)うる大空をもいふ事を成たる事かど。先師たちの說れ如し。ちて天津日。御圀い。古傳小見えゐる如く。精妙(クハシ)ある物の成(ナリ)ゐるよて。甚(イト)も甚も。ゑでゐな御圀小てい。と恐な尊な大神のみ鎭坐(シヅマリ)を事と聞えぱよと高天原小神留(カムヅマリ)坐を事と。皇祖天神の神功た。此。御圀小

天ノ御柱ヲ築立賜ヲ因テ。成固まりそれ御
圀の至剛ク至健のる。靈機ヨ因リテ。そを中心ヲ
ゐて。大地まと諸星の圀々を。みな相隨ヒて右旋
小動旋るよしある。或説小其ノ大かることを。
徑八十八萬六千九百五十二里。凡て里數時辰
小因てなげ。その一里ハ。西洋の譯書
ゞ十四町四十間あるとそ。我地球小比ふれバ。
其大なるあと。或説小一百三十八萬四千四百
七十二倍ともなの。其ノ質ヲ地球の如き暗体小
おどやも説れど。寅吉物語小。現ヨ飛行なて見
る。正説小違ヲバ用ゲとし。又此小三動あり
て。一ヲ自軸を繞リて北五日半ヨて轉ジ二ヲ太
陽の重心を繞リて轉ジ。三ヲ太星圀の中心を繞リ
て轉ぞともいヲり。かくて。尤天日御圀小親きハ。水星。又
辰星をも稱テ。全徑三千零二里。地球より
小ヲと十七分の一あり。大陽
を距るあと。三千七百萬里。二十四時小て。自ら
一轉し。八十八日。或ハ八十七
日十一時四刻二十五分小て。
天日を一旋ヲ是それ第一郭なの。其次ハ金星。
まる大白とも稱ふ。全徑七千七百里。大さ地球
なの。大陽を距るあと六千八百萬里小て。二十三
時半或云十一日四刻二十一分小て自ラ一轉し。二百二十四

日七時或云二百十四日。小て。日圀を一周ひ。おれそれ第二郭おア。それ次を大地とひ。中數徑ハ七千九百十二里。赤道中徑ハ七千九百二十六里。兩極中徑ハ七千八百九十九里。と九千五百萬里。二十四時我十二時小て。西より東小向ひて自ラ一轉し。三百六十五日六時或云三百六十五日二時五分六秒。小て公轉オホメグリひ。大地を星を月とひ。地より小十二倍。其全徑二千百十四萬里。凡二十七日八小て自轉。まと公轉ひ。おれ第三郭おア。繞る惑星をもいふ。全徑四千百八十九里。日御圀を距るおと。一次を火星とひ。又惑

億四千二百萬里。地球よア五倍小おめ。或云大地の七分一おり。二十四時半時或云我十二時三十九分。小て自轉し。一年と三百二十一日或云六百八十七日。小て公轉ひ。まと火星と木星とれ間小。五十七の小惑星あり。エステ。セレス。パラス。ヂユーノ等をいふ。或一説小。おた元一惑星おるグ。破裂せし物おらむといアア。おれ第四郭おめ。以上皆大地より小き惑星おり。次を木星とひ。又歲星ともいふ。大地の千二百八十倍或云一千四百七十九倍。而アて。全徑八萬七千里。日輪を距ること四億八千五百萬里。十時小て一云四刻五分。自轉し。十一年三百十四日或云十一年三百十五日と。

日。小て公轉に遊輪の小星四箇ありと。我が月輪小同じ。
おれそれ第五郭おり。次を土星とに。又鎭星ともいふ。
大地の千倍或云九百數十倍。或云小て。全徑七
里。日。圍を距るおと八億九千萬里。十時半小て自轉し。二十九年
半或云二十九年五箇月十五日。或ハ三十年ともいふ。小て公轉に。それ第六郭おり。次
小屬をる衛星八箇あり。此。それ第六郭おり。次
ハ天王一名ウラニユス。也。大地の八十倍小て。日。圍
ハ相距るおと凡十八億里。八十四年或云三萬
十九日。小て公轉に。衛星四箇或云六箇。ありて。東よゆ

西小向て進むとおれ其第七郭おり。次を海
王一名ネフチユン。也。全徑三十五萬里。地球の八十
云。海王星全徑三十五萬里。或云二百五十倍。〇校者等
誤おらむ。然るを此。星ハ大地より大おること一
千倍。全徑七萬九千里。木星ハ地球より大おる
事一千二百八十倍小して。全徑八萬七千里とも
あり。然る小海王星ハ。彼。兩星小比較だ。僅ハ地
球の八十倍おる小。其。全徑三十五萬里として
も。中徑と立圓積の數大小相違して。殆大陽の
全徑三分の一小過ぐ。大陽ハ大おる事ハ。我大
陽屬中の遊星を。悉く統合一塊とするも。猶大
陽の大おること。五百倍といふ。案ふに海
王星ハ。三萬五千里餘りハ全徑おらむ。日。圍
を距るおと二十八億五千萬里。百六十六年小

て公轉ス。衛星一有ヒ。それ第八郭ありと。或日輪常ニ居テ其ノ中ニ十一餘星次第ニ圍繞行レ之。宗ニ以テ二日輪一爲ニ樞紐之位一。此ノ十一星ノ中。惟木星至大。土星次レ之。天王又次レ之。地球又次レ之。金星又次レ之。水星又次レ之。まる假ニ如シ地球離レ日ノ十分。水星四分。金星七分。火星十六分。木星五十二分。土星一百分。海王一百九十六分と云ヲ以上ヲ西洋説ヲ因テ舉ル。此ヲ謂ヒ緯星ありと。

小。有ヒ。諸星ヲ悉ク皇祖天神ノ天ツ日ノ御圀ヲ造成給ヘル時ニ成出ヘル物ナル故ニ。萬星共ニ小。天ツ日ヲ中心ニシテ。周旋ル由ヲ。即天日ノ御柱ヲ立賜フル。神機ヲ因レリ。ちて此ノ他ヲ、天日ヲ距ルヿ甚遠ケレドモ。旋轉ノ勢漸々ニ衰テ。列星ノ在ル恒星天ニ至リテハ。大約一萬八千年ヲ經ヘテ一周セルナリ。委ク記セリ。げニもちて謂ヒ。恒星又の名經星。のヿヲ。晉書の天文志ニ。晉大史令陳卓。總甘石巫威三家所著星圖ニ。凡二百八十三官。一千四百六十四星。以爲定紀トなるヲ。原ニ取テ。保井筭哲ガ。新ニ六十一座。一百八星ヲ撰加スるヿと。或説ヲ見え。後漢書天文志の注ニ。中

外之官。常見者。百有二十四。可レ名者三百二十。爲星二千五百。微星之數。蓋萬一千五百二十。よと隋の天文志ふ。總有二一百五十四官。一千二百八十三星。竝二二十八宿。及輔官附坐一百八十二星。總二百八十三官。一千五百六十五星なども見え。西説ふも。或ハ此を分二七等一。多レ光而大者爲二第一等一。其數約十五至二二十之間一。第二二等約有二二百宿一。第四等約有二五百宿一。第五等約有二千宿一。第六第七等。其數多。その大數を千萬やをも。萬々やをもいひ。よと其他ふ普天とて。我の載く經星天の如ク。天界の數千ある由説ひ。よと故あアて。神界より承ケ傳ヘ有ル祕説も有れや。此ふ見え現しがと。寅吉物語ふ。我らが見避る諸天界も。何との申し大神の御腹内ふらむも。知難しやをる如く。彼數千の天界をもや。よと合せて綱羅ある天界の。幾多有むも知らるべまふならば。それ將皇祖天神等ハ御靈賴ふ。かきをのふかくまふ。仏魔けき人智を以て。比量知らはべき際ふ非るぬ。

のれおれより遥(ハルカ)にちなか。須佐之男大神のいまざ。
月国小行幸(イデマ)ちゞ。ひし時よ。此大地小天降(アモリマシ)坐て。出
雲国小大宮(オホミヤ)を建(タテ)給ひて。其御子孫等と共々小。御
父大御神の御功徳(イサヲ)を。相受けおぎ賜ひて。国土(クニツチ)
造成賜(ツクリナシ)ふるを。三世御孫。大国主大神の生(アレ)賜ひて
後。御自らも夜見国小入て。隠身(カクリミ)と為(ナリ)賜ひ。大国主
大神も。其御功徳(イサヲ)を継(ツギ)まして。少名毘古那命と御
兄弟(ハラカラ)を為(ナ)ひ。御心をむおび御力をなもせて。終小
此国土を造成(ツクリナシ)ふ給へるとも。愛(アヤ)小皇祖天神(アマツミオヤカミ)の大
御心と。天下四方の萬民を。撫恵(ナデメグ)ませ給ふむとて。
殊(コト)小我天皇の大御祖。皇美麻日子火遠々々藝命を。
天降し賜ふとして。鹿島(カシマ)香取(カトリ)大神を勅使(ミツカヒ)として。
出雲国ある天下作らしゝ。大国主大神も御許(ミモト)小
降遣(クダシオコ)せ賜ひて。顕明(アラハゴト)政をだ。我御子皇美麻命小知
らし免。汝命を幽冥(カクリゴト)政を治看をゞしと詔(イリ々)ひ。猶い
や慇懃(ネモゴロ)ふる大御詔のまゝしのバ。大国主大神も。大
命れまに〳〵。やごて此大地をバ譲奉(ユヅリマツリ)坐て。皇美
麻命の鎮坐さむ。大倭国と申て。己命の和魂を。大

三輪社ハはせ。それ貴の御子。阿遅志貴高彦根命の御魂を。葛城賀茂社ハまませ。積羽八重事代主命の御魂を。宇奈提社ハまませ。加夜奈留美命ハ飛鳥社ハませて。御自ら。八穂米杵築宮ハ。長久ハ隠賜へと。是を以て我皇美麻命を。天地と無窮ハ。顕明政を治看し御事を成と。凡て此等の精義を。古史傳ハ因りて見るべし。

王鉾百首ハ。物皆を。のはり行ぞも。明き神吾が大君ハ。御代を常ハ。

と詠れ。まる曾根孝直曰く御国を挂巻も可畏き。天照皇大御神の。御生産せる御国ハして。天下知食し天皇ハ。それ皇御孫ハ座して。幾千萬世も皇胤ハ易と座ハと無く。いく千萬世の末までも。天ハ日ハなを。と穢し奉る。堅磐ハ常磐ハ栄まし。天下穏ハ治と。不伏奴もれく。日大神の御末ハ天皇ハれだ。それ皇命の大御心ハ。万誰しの奴ぅ。尊み恐み。おぢおなを捧ぎもはこととあらむ。万萬事ハ不足ハと無く。先異国。漢国。天竺国ハなど云って。身を容るゝ舎ハれのと。皇居ハど云って。国ハの初めれ時。八廣殿を立らるゝハれど見えて。いとゞ異国と。殊ハして。萬事の事

足ること、此をいても知られぬをし。事足国ぬ千秋の長き葦原の中ぬ水穂の皇御国小かも有ける。然るを今の愚癡人ぞ。儒佛ぬ道まねなてしより。萬事ぬ明の小事足ひぬぬ思ふおそ。いと〳〵非ぬ心得あやけれ。抑おけれ二道まねなてしより。中小。人心惡賢曲邪あやて。ののや小恐な皇国の上古ぬ清き眞心ぞ失なひてて、。何くれの別ちもれく。いよ〳〵益有るばくもてらぬ禍事ども出きけやぬよ〳〵用おな穢な異佛ぞ尊み。尊む

べき御神をぞ尊まで。事もれなおと思ひ私ふ因ぬ。中昔ぞやぬ天災地異おはく。禍ぬ日、神ぞ荒ましけふ。抑皇国の神道ぬ置てハ。外小信おふをな道もおく。敬ふをな物もおし。又天地ぬ始めの道。道の祖道眞正ぬ道の可悋道。今の御世まで傳ぬきよせ。皇道ぬしも。異国の道おどぬ如な。人の邪曲小智もて作設けとる。賤く穢な道おどい。一口小云むも いと不禮しく。片腹いふし。ぎも他国の道とい。

人の狂曲邪智もて。ぱ。作ア出ゐるもれなれバ。い
ま人の上の邪智もて。其道の上を見るのちお
て。其道れ上の心ばへれ。隅々まで見もほを。此
道のをぐれゐをばはいそ。のくまで精くいのれ
おぜ思ひおむ。御国れ道た。天地の始れ時。畏な
大神大正の大智もて。傳牙給へる大道なれだ。
今人の小く賤な。狂曲邪智もて知らむや思ふ
をア。其道を中々小浅く事もおな道のおと聞
えいよいよを〳〵暗く成て。いく年月を經れ

ぜめ。暁るおと能をばゞ。譬へバ田舎小て。雅言お
どいをむおいぱ。ゐれゐれ人々い。雅言をえ知ら
ぢれバ。却て此を片言など云むの如しぱよ人
心おれ他儒佛の道小移アしよめ。皇国の清な
正れ心を無くおりて。君臣上下れ別も無く。己
の心のまゝ〳〵。臣やをして君をも犯奉る。淺よ
おれ事など出來けア。そも崇峻天皇を。蘇我馬
子と。東駒といふもの犯奉ア。源頼朝を。安徳天
皇を驚し奉ア。北條義時い。後鳥羽順徳の兩天

皇を廢し奉ㇷ。足利尊氏も。後醍醐天皇を驚し奉ㇷしかり。此ちは奴(ヤッコ)も。皆漢心天竺心をよしと染(ソミ)おなゐる。大惡無道の逆賊(タブレ)あㇷ。此(レ)ぞおれ儒佛の道の世小漫(ハビコ)ㇷし悩(アヤマリ)小て。禍神(マガカミ)の荒(アラ)びあㇷける。玄道云。鈴屋大人の。此奴らゲ事を。馬子らゲ。草むしたりて。耻見せましを。大王の。御命おそれぬ。くなりて。耻見せましを。大王の。御命おそれぬ。くなたぶれ。おこれ泰時。右これ尊氏。のしおきや。そめら御軍よ。い向ひて。おやを奉ㇷし。たぶれ足利。おどめ詠まゐる如く。宰小天地小容れざる大罪人どめふて。先師れ玉ゐにおふも。論ひあ醜(シコ)る沙(モ)見るぼく。共夜見。圀小逐(ヤラ)はるべき者おると。下ㇾはのけゐふを見るぞし。よと尊(カシコ)な御神を尊(タフト)まで。

用おな穢な黠(ヤツ)佛をれみ尊むよより。御心廣ㇰ神ゐちをぢちらでも。心狹な神等い。御怒(イカ)ㇷまし。荒び賜ひて。のるい天地(ワカジニ)ㇾ。水災火災又を亂圀戰圀をㇷ。貴賤上下れ別(ワ)おく。元弘建武の如な大亂又を應仁より天正の頃まで。少しめ軍戰れ止おやれく。のれ漢印度の如な風俗と爲ㇷしも。佛を用る世や爲ㇷて。此佛道盛小行ほゝ小因ㇷ。心狹な神等の。かく荒び賜ふもれおㇷ。玄道云。此をは大神等と申せぞめ。絶て御荒びおしと

ハ定めが多き由あア。そい宗と荒魂の御所爲小因る古と有多はしを云む引て彼天敷有十二也地天水天火天風天云々如是諸天何時歡喜何時瞋怒謂諸國王及諸人民以非治世外不善業而捨正法爾時諸天皆生愁憂愁憂卽過便生瞋怒若止惡業以正治世諸天歡喜皆悉來讃と瞋怒を生ぞと云古と中小、過て瞋怒を釋まて愁憂を過て說かなア。國家を治む人をよく思ふい。說かおそと有るをよく思ふべき珎小味なく太平記を論らひて此人々身れ難き事を逢ひ不肖なる時い政道も諫ひの後能行古なむる時や有よし一事も通せば上暗く下も冨も貴賤の人望小も遽ふて我非をだ知らば人を謗合ふ心あり只獅子の蟲それ肉を食ふ如し適仁政と思ふ事も只人の煩ひ勤なのみあり夫仁とい恵を四海小施し深く民を憐むを云ひ政道とい國を治め人を憐ミ善惡親疎を分るを申にあア然る小近日聊も善政を聞ぞ君臣父子の道をも辨ず只人の財を飾らんと事を長久小運を持ざるなり君ハ輕し神明を恐るゝ處あき末世かまだ其外の政道何事の有るゝをも有ふ輩何も亡び逆れ道おそ替れ猜なもぞ合卿以來北條賊ら大御神も暫くも天磐屋戸小閉籠坐し雉日女尊も神避賜ふおとれどを倩案奉れバ日吉山王記小大御神も今い下地ま八幡大御神の天平勝寶七年の御託宣小若我氏人の中小一人も愁歎をは

者にらず。社を去て虚空に住みて。天下に種々の災發ちむと。詔賜ひと。宇佐宮に祈奉れし時。童の口に託て。平氏の宇佐宮に祈記し。平氏の中に。宇佐八幡愚訓あり。神もゝれなものを。何祈るらむ。心おくしと詔給へるおと。源平盛衰記なども記し。春記には。七月賀茂大神に。天下政の不法を憤らせ給ふ事あるとて。六條天皇の仁安元年に。遷ると給ふよし。兩度或人の夢に見え。まゝ何時ぞのとや。我もれむ。人いとおらに。爲してバ。まと雲にけて。上るばのとも。袋草紙などに記せるも。ぞ。と詠せ給ひけるとも。浮る説おらば。宋に虐政の暴行て。群黎百姓の憂悴ぬる時は。鵄ノ遷リ幸デ行ぞ御おとも有けらし。おれ畏しや。天下造らむ大神を。永久に幽冥ノ政を治看ル事をぞ定るかける。是を以て王鉾百首よ。顯明れ。事

○夜曾遒久萬泥一　○十九

た大君のみ事を。大國主れ。神の御心。よと八雲立。出雲の神をいのふ思ふ。大國主を。人を知らでやも。め目に見えぬ。神の心れ。神業ぞ。おはふか思ひそ。とも詠れるを。

師説よ。此大神を赤縣ふた。太昊伏義氏と稱し。玄家の書どめふ。扶桑大帝。東王公とも。大眞東王父とも。木皇公。とも申し。大后須勢理比賣命を。女媧氏をめ。太眞西王母。まと金母をめ稱し。其宇豆御子言代主大神を。暘谷神仙王と申

し少彦名大神をぞ。大己小子とも。東華方諸青
童君とめ申し。天竺ふてい旃摩（羅天と申傳ヲ）其初ゑ天の太
祖及上帝れ詔命ふ因て。伏羲氏女媧氏をもふ。
彼国へ渡ひて。蠢化の民ゑ含養（クヽ）ゐな法を立
て。功烈（イサヲ）を子て。復命（カヘリゴトヲ）せる古傳を。淮南子ふ載（レル）し
て。乘雲車駕（レテ）應龍（ニ）道鬼神（ヲキ）登（リ）九天ふ朝（レ）帝於靈門ふ
穆（トレテ）休（フ）于太祖之下（ニ）と云（ヘ）るも。右の古事を正しく
傳ゐる由。赤縣太古傳。及三五本圖考等ふ記
ちれ。天竺の古說ふ。睒摩羅阿須倫（ヤムマラアスリン）王。まゐ閻摩
羅（ラ）王。阿修羅（アスラ）王をいふ神王をも。恐（カレコ）くも我須佐之
男大神と。大国主大神とれ御事業（ミレワサ）を同（ヒトツ）一ふ混（マジ）
雜て傳ゐる物ゐる事い。委く印度藏志ふ說（トカ）
れゐり。

ちて我人をもふ。此世ふて假世ふて八坂大神の御
の苦しき事を。思へ（ば）ぐし。何ゑげくらむ。假のやど
ふ（ぃ）と或者ふ示賜へりと。撰集抄を初め。物どもも
ふいひ。或ハ稻荷神のとも。新古今集ふ宇佐
宮の御歌とて。何ゑげくらむ。假の此世を。といふ
ぐの見えとる。をもふ眞偽い知らねど。理をちるふとを
て。終ふ幽冥界ふ參向ひて。天下造坐（レ）し大神の。御

統馭を受奉らでは。得あらぬ神代よゆゑ。御定免ふしなれど。後世ぞ常住不變ある。眞世ある故を
く思ひ定免て。此た師の古史傳を始めて。何くれるを先夙く惟神の書小委曲小説れるを見て知
し。木柱太く堅く。心神を築固免て。横ちけ道小惑ふおを無く。上を天神地祇小天皇小よく事奉ど。
父母小孝敬をおくし。妻子をたぐゝみ。兄弟親族
故慈くゑみ。朋友を初めて。万生を憐愍みおど。カ
の及ぶ限ど。善事善行を務め恪て。此世小功名を立て。有功人と爲ど。世をまのどてた。有功神
を爲るぼく。仕奉はべきどぢおめけど。これ王鉾
百首小伊豆のめせ。いおの御魂を得てしならぢ。
漢の曲れる事ちとどてむ。いぢおどめちのしら
せびて。靈ちもふ神。神れみしわざ助け奉おろ矛。天
地の神れ恵みし。おのめせバ。一日一夜も有ど得
てましや。まと命おぐ食物衣物。そむ家ら君の恵
ぞ。神の恵ぞ。世々せ祖の御のげ忘るれ。世々の祖
も己の氏神己の家れ神。父母も。我の家の神。我神

と。心おくしてい於け人の子ぬえくさの妻子奴らた皇神のぢおけし寶。うつくしみせよ」よと「天照ル神の御民ぞ。御民らをれはろこのふにあのだのれる人「皇神のぱめぐゝ思はを人草ぞ世中の人のしくもれ色ぬ「此歌の義ハ大平翁の解ル因テ見るゑし。をよまれ。先師も「いぢおどめぢこのしらや免て。現人れ神小習ひて。祖ないおこの彩「玉ゑるをなかけて祈ぢあ。世々れ祖の御おやれ神の幸ひを」此も玉一襷小委く解れるるを見し。をも詠ヨマさるはる如く。我人の祖の祖と探窮

れだ。卽皇祖天神小坐し。皇祖天神た有ラる我人。ほと萬物れ大父母なて。畏くも天日嗣知食ル吾ゑ天皇命たそれ宇都之御子と大坐ル。御事小しあれだ。皇祖天神小よく仕へ奉らむ者ハ。天皇小能仕へ奉らでハ有ルべうらゞ。天皇小よく仕へ奉るかむ。卽て皇祖天神小。能仕へ奉る道理ある於ちゑを。皇祖天神よと天皇小忠孝ふ仕へ奉ると稱ふも。徒小朝かタかふ禮拜奉るのみを。謂小たてらゞ。先後小舉る如く。我人やもか。皇祖天神をも恐

くも降(クタ)し賜はれる。魂神を枉(マゲソヘ)傷たべ。直く清くし。言語を愼み。身行を正くゐて。二親ふよく事ゑ。一家ゐよく治めぢて萬物をも撫(ウツク)愛ゑみ。若(シ)志ゐ得るらむふた。一鄕一圀ふも及(シキ)てむと。務(ツト)免勵(ハゲ)むぞ。やごて恐(カシコ)くも。皇祖天神の大御心ふ。符(カナ)ひ奉れる事と知られて。天皇ふも。皇祖天神ふも。のくてゐそ。よく仕奉る理ふぞ有(ア)けれぢまぞ忠孝の道い。唯一ふして相(アヒ)須(モチ)て相離(ハナ)れざるぞ。神代より傳へ來し。神隨(カムナガラ)ふる眞正(マサシ)き道ふい有(ア)ける。」

本居春庭翁も。己ごの先祖も。天神ゐ地祇ゐ。定(サダ)ゐ知られぢをめ。源平藤橘の五伴(イツトモ)の男(ヲ)ど神の。御子孫ふ紛ふな身ふぞ。大皇圀の道ふ貴ぶ。ぢきを。却て人と為るに順ひて。己ごの先祖まで。誹(ソシ)謗(リ)奉ることを學ぶ徒い。皆天照大御神の罪人ふあゑとて。漢學ゐる徒の弊(ツヒ)ふ委く說れるゐ。或人の。其が系圖を問へるふ。中ゐ世と。のけてわろ孫ど。本をみれ。天照神の。御末ふあめけ。ゑ」と詠て答ゑしとぞ。其の人こそ。取るに足らね。宗ふもちる說ふおむ。まこと鈴屋翁ど說ふ。人の生れ來る始め。又死(シニ)て後。いのふるもれ

ぞと云ふおと誰も心ふりけて明らめ知らまほしくせる習ひあるを佛ぶみ説(トキ)ある生死(イキシニ)の趣(おもむき)心性(こころ)はさざいと委しをやうあれぞ皆人の考(カムガ)へ為(な)ほ造(な)おとあれぞよく悟ると明らめとらむもおひふ何の用もあき徒(イタヅ)らおとあると唯(タダ)儒者(ズサ)は説ふ死(シニ)を身滅びぬれぞ心神も共ふ消うせて残るおとおしと云へるぞよく思ひめぐらせぞ窮ふちるべき理(コトワリ)とは聞(キコ)える然(サ)てあれぞも此又信(タノ)みがとし凡を物理(ことわり)を限(かぎり)あきも

のふを火の色を赤なふ燒たる物を黒くあると又灰ふ成をぞ白くおそおれ凡てかく思ひ外ある事有(り)て思ひたこのれるとはいあく違ふる事の多けれバをおぼれぞ人の死て後ちやうも更ふ人の智(サトリ)もて一(ヒト)とりれ出とおるを因(り)て量るを知るばなるべふいならぞ思ひの外れるものふぞ有(ル)るなと論(いへ)るた窮ふちる説ふてそべて幽界をまた更ふ人の智(り)もて。おし測らほゝ限(り)ふならぞと聞えるる霊の宿

替ル曰。我人ヲモ小。心得ヲなれ第一(ハジメ)ニ先(マヅ)和魂
のヲ云方ルテ。儒佛の穢ナ心ヲ祓(ハラ)ひ去(サ)テ。上
ヲ世の武(タケ)く。雄(ヲ)々しき眞心ルあるをいふ。そも
ゑく偽らぎ。雄(ヲ)々しくいちぢよくおゝろかけ。
今の世ヲ。今の大御法ヲ畏み敬ひ。人智ヲ用ひ
ぎ。眞窠ル神ヲ尊び。我(カモチ)持(ヘ)料の家業ヲ勤め。主親
ヲ大切ルし。我よゆ下ヲだよく恵ミ。他人ル及
がして。物の哀ヲをく知ヲて。身ヲ行ひ。世ル隨

ふゞし。如(カク)斯行ひをましても。心の外のたゝのら
ぢる災ルても來ヲおだ。されば禍神の御業と心
得ヲ。ゐ(ヨ)も禍神ル御心ヲおおゑ奉り。直日の
神ル御恵みヲ祈(コヒ)ぜ外ルし。まさ主親の爲ル。我(ガ)
一命ヲ捨る事ルてても來ヲおだ。されも神の御
心ルれだ。潔く死ヲ決しおくれる名ヲ。後代
ま殘ヲゞのらば。常々人ル交ヲにも。我(ガ)心ヲ和
らゝのル交ヲたとへ其友ル惡ナ者にヲて。我ル
仇ヲおにとめ。ゐるゞき程ヲ。見直し聞直し。了

簡して。おれみても其人惡(アレ)きふ却のアなだ。いで此時ぶこそ。もるをまじきかめ。其外れ萬事。此心をもてよく〳〵勘辨(カムガヘ)の上ふて計らふべし。鈴屋大人の歌ふ。玄きしはれ。やまとおゝろを。人やそ。朝日ふ匂(ホ)ふ山ざくらだれ」櫻花を諸木の花の王かめとなれアそれ櫻花な。散(ナ)る時節ふハ。花のえばみをも枝ふ殘さば。未錬(ミレム)かく。其いさぎよき事。諸木ふ勝れとめ。御國人の心そ。何(イカ)ある心ぞといふからだ。我ハ櫻花のうはえしく。朝日ふ匂ふ心ぞといふ事かめかくはた如く常々心を持とだ。心も安らふ清く潔く。神も恵を幸ひ給ふれアる。玄道云。大人の此歌の意(コヽロ)ばえでなふ付て。思(ヒ)出(デ)る。或人の瘡(オコリ)疾ふ困じるを。或友の此歌を朝夕ふ唱ふべき由を。教(オシ)てせちせるふ。やがて愈(イヘ)りを聞けるを。東野州聞書を見れだ。千五百番歌合ふ。朝日のげふはへる山の櫻花。おれあくいふ歌を。頓阿(トンア)が何かる。心の清(スガ)〳〵と成るとて云。ることも。思(ヒ)合されてあむ。扨(サテ)我が大御國の人々た。尊きも卑きも。福者も貧者も。坊主も醫者も。皆神々れ御番(ミスヱ)ふて。其

家の業々も。神も始て傳牙給ふ事ハ。知ヒある
如く思ひをれども。誠もよくもちぢる故ふ。神
代の大御定めを守らば。己々の向く方へ。魂を
動らさい。知ぢる故の迷ひふかり。扨世の人も常
ふ心の動く初ハ。どうぞもいゐだ。貴賤老若男
女の差別おく。いゑべこのおもしとおもふ妻子
ふてめ。神業ふて死よ至るを。無常の風ふちそ
れしを名付て。其身も弱ヒ果て。それ折しも。
法師を爰ぞと抱け込て。無常の風の加勢をさ
れぞ。いや悲しち彌益ふ。どうもてもぜひ一度
も死ふ糸ハからぬ。此身の上ふり。且我身死て
後ハ。どうふヒ行もはとおもふ心ぢ。迷ひのそ
じめ。いのおる強氣ぢ男でも。年の五十歳ふめ
ふヒぬもぞ。最早老先近しも心もよあり。佛の
妙法ふ取もそのはも。神代のヒのヒが多ち傳牙を
知らざは故ふヒ。日本紀の。難波長柄宮ふ。天下
知しめさ給ふ。孝徳天皇の御巻ふ。惟神者。謂隨
神道。亦自有神道也。此もいろふと云ふふ。神ふ

ごらといひよおのおのら隨ふとた。天皇の御大祖ホ坐ク。皇孫瓊々杵命。天降ヲ給ふ時。供奉の神々ヒ御子孫連綿と仕ヲ給ひ。皇孫瓊々杵命。天津国よヲ。の詔リを。受ケ給へる儘ヨ。今ホ此国ヲ。永く動なれくゐろし免し給ふ。此を自ラ有リ神道と云ふおり。卽ち神の仰セまふくといふ事おりばと天皇の御上ホ於キてそら。萬ッの事ホ。御心のまゝホたも賜ふことおく。彼の高天原より降賜ひし。天照大御神の。御タマシロ。靈代の御鏡を。天皇の御同宮ホ祝ひ祭ヲ給ひて。事ヒる時た。大御神へ仰セ上られ。大御神の御教ト事ホよヲて。天の下ヒ治めヒ。萬ッの行ひを。神のまふくおし賜ふ。是レ等皆自ラ神ヒ道ホ隨ふとた云事れヲ。何事も我心を用ひず。萬事上ヒ代の定ノリ法のまふく。せし故ホ。下とゐて上をうらぐふ者おく。国豊ホ榮え。人々正直ホして。命長く病もおく。やとりと朴ラある人氣おヲ。然るを儒佛の穢キタナ心うヒ。ゐり來て。見ぬ外ッ国ヒ聖人ホ。

ヱたごのり。又佛かどゝ成るゐいと。あがけぞめ。神代の定法。大御のヱまを破ヱてい。後の禍となる事あり。神代の定法と云ッた。人間の身ぶそなヱヱし物かれバ。何とまて穢くむさくほした。立ちぞくみかた。成度てもかられば。彼聖人かどれ如く。狗を殺して生で喰ふようれ。ゑバむちな事ハ出來ぬ。云々。神國の人ぢ。絶てかヱがとなく。此國を。神國ふまて。人身を不淨のもれかり。抑此國ハ。萬物萬事。みな神業ふして。別ていふも更かり。萬物萬事。みな妙かる大御法かれだ。此國人の身ふそかたヱる事ふて。後の穢な佛聖人を願ふよりた。早く心な改めて。かしこた大御法ふ隨ひて殊ふ生死の事た。聖人の教へふも。佛法ふも。人の智慧才覺ふも。力業ふも及ばして。奇しき神業かるおと。いふも更かり。其一ゐいたゞ。孕みとる女。其子を産むとき時ふ。今日ハ惡き日ぬるが故ふ。明日ハ日延しようと思ふても。其時の神ぢ御心かれだ。晝夜の差

別かし。是産婦の自由かもかならぴ。生れ出る子の勝手かもかならぴ。よと死ものくれ如し。今日も寒いじやよ依て。暖かる日か死ぬいねど思ふても。是まと人の自由かからぴ。又人の禍福も。何程金銀をかしいと思ひても。腕ぢくかもるもあり。阿房者か大金持もこのゆ。是等か神業にして。人の智慧の及ぶ所か有らぢれバ。鬼角我智慧を頼よせぴ。神よく祈るぴし。おれを

時節じやと。利口らした顔で。口かいひとる。其いふ時節が。神業かて。人の若らとし者れ。段と年老黒髪も。白髪となる。頬か皺の出るも。神業かれぢ。世事と心得て。神業れる事か氣のおくもれかし。言もて行けぢ。夜の明るも。日の暮るも。四季の替と行も。雨降風吹。人の身れ善悪も。都て天地れ間れ。皆不測かして。妙かる神業かと。この、れぢ彌々益々。神の尊くかしこなをよく思ひとの上て。朝夕ともか心身を清く。

神を敬ひ。我(カ)身の安泰。子孫の榮えを祈り願ふ
ゑしちてまよと死(シニ)ゑるはかもめ、靈(タマ)を。何處(イヅク)へ行(キ)て。
ぞうかる物ゝ又有(ア)る物ゝ。無(ナ)いものゝといふか。
人の死靈のありおと。疑ひかし。是(レ)を佛法かて。
妙法の輩ゞ。己(オノ)が勝手をよようか。口よ任(マカ)せて。
ゑゞにのたれかる限りいひきけ。亦世の人は腹
ふあふ樣か。善事をかをもれい。極樂(ゴクラク)へ往生
いゑし佛かり。惡業かる者い。地獄へ墮(オチ)て苦
むといひ。亦儒家かていい。死をる者よ既よ朽(キユ)穢

をも心も亦飄散をといふて。ゑとへで燈(キエ)消と
るが如しといふが。皆押當(オシアテ)了簡かて。取(トル)よ足ら
ぬ。勿論外よ圖々かい。古よ傳說(ツテゴト)かけれで。知ら
ぢるも理(コトワリ)を云へよ。此よ鈴屋翁ゞ說を注(シル)べ疏せ
つゝまゝと翁の夜見圀へまゝかとし。論ぢれるる似とる說かまでありげ
も師說の如く非(ラ)かとかれバ。そも畧なて引(キ)つ。
ちて道ちふ道よ本を。玉鉾百首か。三柱。御祖の神
ぞ。玉鉾の。世れ間(ナカ)の道。始(ハジ)め賜ふる。まと天地の。極(キハ)
み御(ミ)てらし。高光(タカヒカ)る。日ゝ大神よ。道ハよの道。とも高(タカ)
御座(ミクラ)。天よ日よぞと。日ゝ御子(ミコ)よ。うけ傳へ坐(マ)し。道よ

此のみち。まと「天」の下。青人ぐちの。朝夕ふ。御蔭と
よそる。道もされ「道」おほど賦まるほ如く。やごて隨
神かる道ふて。天地の初の時ふ。皇祖天神の。伊邪
奈岐。伊邪奈美大神ふ。天瓊戈以賜ひて。是多陀用
幣流之国を。脩理固成せや詔賜ヲるふ始ヱぢて
後よ御言揚。まと御柱巡の事を。改賜ふべく教悟
し賜ひ。出雲。俊信。宿禰の語ふ。天ッ神そら其。由よし
給ひ。まと此二柱。御祖大神そら。慎ヱ給ひる事
の有りて。改て云々詔ひ教ひる事あど。皆尊き神の道
ふして。畏けれど今の代ふも。思ひ過てほ事ぢ。人
の教を聞て。速ふ改むべき事。疑しき事ぢ。トふひ
て。神の御心を問ふべき事。又改めいひてい。言靈
の幸ぢひ助けて。身の幸ぢひふ成る事も。思ひ合
そべなふヱやあるい。一實ふちる説ふふむ。二
も。天津大御神の。大命ぢ。二柱大神ちヲふ。かく何事
照坐日。大御神そ。大御父大神の大命のまふく。
高天原を永久ふ知看ちい、ぞ。此隨神かる道ぢ事。
本ふて。萬葉集。歌よ。柿本朝臣の歌ふ。神長柄神佐
定座奴とよみ。置始東人。備世須登。まる神隨。太布座而。まる神隨安
大伴家持卿の歌ふ。神隨。神等座者。
かど詠るハ。天皇或ぢ皇子の御上ふのけていひ。
作者知られぬ歌ふ。神柄と。言あげせぬ国。山上憶良主の。神
本翁の。神ぢら。事ぢ。柿
奈我良。於毛保之責之豆。
良。愛の神ふぢの盛ふ。天下。奏るまひし。家子といふ類

た。臣と民と上小このけ。藤原宮の役民の歌ふた。
神長柄所念奈戸二と。天皇の御上ふのけて。ちて
下小神隨尓有之と。民の上ふのけてもいひ。柿本
朝臣の讃岐の国ハ。国柄の見れどもあゝ。神柄。
ふゝ。貴な。や国ふもいを
のむさびいよに。くゑみ
とみて。凡て人ふよれ。物
なまよ。物すてるを。惟神と
家ふちる説かめ。遥後小。皇美麻日子火邇々芸尊の。天降
坐し時小。皇産霊大御神。天照大御神の。大御口於
のら。天津祝詞の太詔事もて。天下の御政申賜ふ
ばな道を。悉々小事寄させ賜へるぞ。我神代の古
事なるを。御々代々れ皇御孫尊い。それ大御寄詔
のはふく。御自の私事を。少も加牙給たび。萬於
小天津宮事よ因て。御政を聞召を故小。惟神之道
を申に。是をいて。古事記の表文小。此を本教と云へ
卫。鈴木朗が説小。異国之道也。或ハ違ヒ或ハ靡ス或ハ害レ或ハ輔ク
参曼衍普流ヲ亦出ニ神意ニ非ス人之所ニ能ク爲ス也。夫レ惟神惟
皇不レ識ニ不知ラ敦厖純固清靜寧一十ルハ者。上古之神道也。
祖ニ上古ヲ父ニ中古ヲ身ハ今而實ニ友異国ヲ者。方今之神道也。
とある。上古れ神道の説いい。ちる説かる拠。方今之
神道といい
のゞあらむ。これ親王等。五伴緒神等。御斎と坐て。
御政をてのふゝひ輔奉らせる。臣連伴造国造等い。
更小も申ちびて。下の下まで。其惟神かる御政の。

御化の隨ふ。清な明な正しな直な心もて。皇大神ふ。大君ふ。能く仕へ奉ア。父母よ孝敬を盡し。兄弟妻子朋友かどをも。撫愛みかど。勤め勵みて。ゃはふ怠ア已おとかた事にしあれど。古語ふ。我が御世の事。よくこそ神習えま。青人草習えやといふ。神語も有ふかり。ちて其ふ神隨かる。古傳古語よ。熟く聞き博く知りて。後生を誨牙悟に人を。物知及事知とも。又鹽土老翁よ稱ひ。出雲風土記。常陸風土記ふ古くよめ何ふ老某ふ老と古老曰云々といひ。又ることといふ稱の多ふ如し。よと朝廷を始ゑて。諸國ふて。神代の古事を。普く諸人ふ說諭を職を。語部をいひ。佐藤信淵ふ朝廷よハ語女とアといふ稱ふて。物部久米部やふら祢どもも。理きちもあるぞし。此語部の長ふた。天ふ物知ふ命と申ふた。天神の御末。天語連語造のむ祢と。仕へ奉られし事と聞えるめ。そ凡て部と多く群類を爲ふる大伴部佐伯部ふどあるをいふ稱ふて。物部久米部ふ程の事と聞え連ねとた。某ふ組等いふ職そ。千百有りて。俗よ某ふ組等いふ稱ふて。物部久米部ふ程の事と聞え連ねとた。某々の部類を率て。長官と爲て仕へ奉るより。負アる加婆祢ふると。本居大人の說ども。吾が友角田氏の考へも。然る小右よりのげる。ふ職掌ども。禍神の心と。外ツ國

の教おとれ曼行れるとて。漸々小のき闇されて。衰微かむとせるを。天武天皇のいそちな大御心よりそれ興してむと思成つて。親王大臣等と謀らせ賜ひて。神代の古事れ。有のおとく召集へて。此時小天朝は傳ヲさせ賜へる古事を。申をも更小て戸々門々の氏文をも纂記させ賜ヲるかむ假名日本紀ふて。それ即今傳れる。日本紀の元書かるぞく。假名本いと体裁ふてぞ有けらし。其中ふて天皇の大御心と醇粋かる限りを擇び取りて。古事記をぞ傳へさせ給ひけむ此も説長けれど。今を論えば。正しな天津詔詞のおふおふ。大御口おのら。上ツ代の例小因りて普く語傳ヲ。聞習ふ名むとてぞ。阿禮刀自小を。御言依し賜へて。漸々小のき闇されて。

けむ。上ツ代を。文字ハ有ながら。語傳へて諳記せるおと。勿論かるを。天竺も。古を尚の有し事かど。先師の古史徴と。印度藏志小。説辨ヲられかる事を。漢土も元然かりし事。木下順庵ガ説あて。退思錄は見えかり。此小依りて萬国ともちれど猶異小然ありしおとも。推て知るぞし。ちれど猶異教ぞもれ。世小遍く行なれて。漸々小神語かど語る事を。大のと絶果おと聞えて。語部の古詞白れ禮も。徒小大嘗祭の時せみ。殘れるおとゝ成りしそ。いとめでのこべ遺憾な事ぬりけり。ちれど中ツ世よゆ伊勢竹取うおかどの物語を初めて。何くれの物語ど。もの多うりしそ。かは昔の語部の遺風と聞え。後

小轉(ウツ)ゐて。琵琶(ビワ)法師が平家を語るまどもや。のてかのあごゐぞあるべな。そも古談(モノガタ)ゐみゐて。教(オシ)えをはふおよたえてぬるまどを。まさそのゐ轉(ウツ)ゐてもし。浄(キヨ)るゆ語(カタリ)とて。三味線(シヤミセン)の琴よ合(アハ)せて語ゐもし。さてそ芝居と合(アハ)て加(カケ)て作(ツク)りを事と成(リ)てよゐ。年小多く作(ツク)り出(イダ)し。その巧(タクミ)小月よ種々(クサグサ)の態(ワザ)を窮(キハ)め。淫靡(インビ)の鄙(ヒナ)の雑曲(ザツキヨク)なゐ。小至らぬ隈(クマ)あく。全(マツタ)く盛(サカリ)小成もて。都(ミヤコ)鄙(ヒナ)の内外(ウチソト)の婦女(フジヨ)兒等(コラ)ゞ。心目(ココロメ)を悦(ヨロコバ)しむる。最第一(イチバンメ)の媒(ナカダチ)をしも引出(ヒキイダ)るなど。往々(ワウ〳〵)仏聞及べるを。淵瀬小変(カハ)ゆ往く。世のちごといいてゐどもそれ上古(カミヘ)を思ふとかよじけおく。ちるそれなあらじをと。やちのれ歎(ナゲ)きるぞのし。ちて物識人。事ゐ知人ぞよと鹽筒(シホヅヽ)老翁(オキナ)をいふも更小て。語部等(カタリベドモ)の説(トキ)ける状(サマ)を。何小有(リ)けむ。傳(ツタ)へおけれど。上小略(ホボ)師説小因

て説(トキ)ゐる如く。凡て我人の本を。悉(ミナ)皆皇祖(ミオヤ)天神小坐(ヰシ)て。行住坐臥(ツネノタチヰ)。生前(コノヨノチノヨ)後ともか。其御恩(ミタ)頼小漏(モル)るゐと無な事あれぞ。それ天地を造化(ツクリナ)し賜ひ。生民(タミ)を立(テ)賜ひ。それ生民を保(ヒタ)養ちむ爲小と。天皇の御大祖を。天降(アマクダ)し賜ゐれぞ。それ皇祖天神の御嫡流(ヒナゴ)小坐(ヰシ)まして。我(カ)天皇を。宇宙(コノヨ)の大君小坐し。我人の祖(オヤ)先も。多く神胤(カミノスヱキ)皇胤小て。御々(ミヨ〳〵)代々御恩澤小因ゐて相繼(ツ)ぎ來ゐ。總(スベ)て現(ウツシ)世小在(アリ)る程(ホド)を。其御政小従(シタ)奉ゐ。此世を退(カヘ)ゐてい。出雲大神の統掌(スベシリ)賜ふ

幽冥政ゐ隨ひ奉らでえ。萬神の分主ませ神業ぞよと萬物の運行變化。天地間ゐ有もる事情物理ぞよと近くい心身を治免。父母ゐ孝順を盡し。兄弟妻子朋友よゆ。衆生を慈愛むゑな理よゆ。家國天下をも治むる道ねめ。熟く教諭を職ゐさそ有〻け免。此ゐ思ひ合ちるいおとした御門の御政の時そ。國れ内ま年老ゐる翁。おむおやあるとて。古のれきての有〻様を。尋ねて問たし免給ひけれ。ちまぞ老ゐる身い。いとの政を行たし免給ひて。召し合て。世畏ま者ゐ侍りといひ。萬葉集ゐ。物皆そ。新まよし。唯人え。古ゐるのみぞ。宜しのはべまと賦るも。此を思ゐるゐや。梅窓筆記ゐ。鈴鹿家記を引て。永享二年八月。來ル廿八日伊勢講。私所ゐて仕〻候。まと仝月春日講中。皆大和へ參。云々。應仁元年十二月。聖護院村。云々。春の稻荷講ゐ。三个村衆寄合被ル申候。とある由いまえ。今も何講某講といふ稱の有るは。決めて元語部のありし古昔え。某々の大神の御德の事をし。語聞せゐる時れ名の殘れるおこそ。まま或人の講とい。集會の事とせゐえ。深く思えざる誤まれむ。ちて萬葉集卷九の長歌ま。人とまゐる。ゑと難まを。和久良婆ゐ。成れる吾身そ。死も生も。云云も。卷五の長歌ゐ。和久良婆ゐ。人とえあはを。人ゑみゐ。あれもおれるを。ゃも賦るい家ゐちる說ゐて。まだ比登をいふ名いせるい。いのゞゐて。古く日止といふ義と靈止

の義(ヨシ)にてほ(ヲ)靈足(タリ)ちふ由をこの祢。多美といふ稱も。足身(タリミ)の義と。足靈(タリヒ)と。ふ心を。兼持(カネモタ)る稱(ナ)かるばなおと。師。説(トカ)ふ。人を天ツ皇祖神よ(ヲ)り神魂(タマ)性情靈智(アヒアハサキミタマ)を。相發(アヒアハ)せて悟るべくおほむ。此を學(マナ)ぶ柱といふ物は委く説(トカ)ず。よと神宮の記類(フミ)の後人(ノチノヒト)の撰(ツクリ)とのみ。思(オモ)ひ捨(ステ)る小。伊勢大御神の御詔(ミコト)ごと(ヲ)小人を萬物の靈(タマシキ)物也と詔(ノ)りたまへる。其も例(タメシ)のれど。後の荒祭宮の御託宣(カムガカリ)小。民を皇大神の御宝(タカラ)ぞ。と詔へる。小。よりと符合(カナ)ふれど。此御詞のみを。正(タヾ)なる事小て。孝徳天皇紀の詔小。萬物之内(ウチ)は人是最(イト)靈(タマシキ)なるハ。此神語小因(ヨリ)給へるふおそ有(アラ)ん。天地の間小。海山あらゆる鳥獣蟲魚草木と。千種八千種を多(サハ)にほ物の中小。人としも生(アレイデ)出るるハ。即天皇祖天神等の。おほ(ヲ)ほ厚(アツ)き辱(カタジケ)なき恩頼を蒙(カブ)れる上小。師。説(トカ)ば委(クハシ)く説(トカ)れるる如く。千五百国と。国も多(サハ)なる中よ(ヲ)。皇国を殊(コト)なる由(ユエ)にて。おと神典小見えるれバ。今更申にもあらず。外国よりも。神国ぞよと申土をも。君子不(ナ)死之国。大人の国。おど稱(トナ)へて。諸蕃(トツクニ)の人も。道を得(エ)るる偉人を。皇国小参朝(マヰノボリ)て。神仙の品位(クラヰ)を。吾ごの皇大神をも受賜(ウケタマハ)て。來住(キスミフ)もの。由(ヨシ)ある故。大神貫道(ワタル)と。きつと聞えて。それ養神延命錄。磯馭盧島日記等小説るおとあり。就(ツキ)てみるべし。燈臺本

暗しやいふ諺(コトワザ)の如くぢるあや小尊く辱な由を
だ。夢にも知らで。生涯(ヨノカギリ)或ハ衣服(キモノ)飲食(ノミクヒ)好色(コノミ)の爲小。
流蕩(タハケ)ゐて。自ら反を事を知らびぬ草木と同く朽(ク)ち
て。或ハ瑣々(イサヽ)けな。利名をのみ汲々(セク〳〵)として。四方小奔(シ)
走ア。漢人の謂(イハ)ゆる。醉生夢死の徒と成ア。或ハ横(ヨコ)
邪(サヘ)心ハ成リて、。あらぬ教へ小ゑひちまぐれて。世
を終る徒(トモ)も多のほゐ。大かと後世ゑ。妖魅(アヤカシモノ)の群屬(ムレ)
小入リて。永久小此を離出るおと。無しや聞もるハ。
此ゑ先師の。古今妖魅
考小因リて見るアし。いやしめたのれく。も、ゑ

事小て。皇祖天神(アマツカミ)ゐちれ御心小ハいのにいふか
ひなく。遺憾(クチヲシ)く知看(シロシメ)ゐらむと。恐(カシコ)くれども。あれハ
深な。父母の子を思ふ心ハ。思ひあぞらへて。察(オモ)ひ
量(ハカ)ア奉るぞのし。これぞ。山上憶良ぬしの歌よ。を
かさりつぐべな。名ゑ立ぢも。空しるべな。萬代小。
ア。あさ祢だあらび。成るヲばを。あさびて棄る。人
のゑゐれさ。と賦れさるを。忘れぞて。よく恪(ツヽシ)み務
むアなおとあらびや。平。貞丈云く。天地間小生ぜ
ハ物。草木鳥獣より。萬物小至るまで。各上中下の
三等あり。人も萬物の中小て。上中下れ三等あり
上等の人ハ。心正直よ。才智明(サト)のみ。徳行正く。仁義
の道を行ひ。萬事善のみ小て。惡少しも無なおみ。
下等の人ハ。此ゑ反を。中等の人ハ。上等と下等れ
間小して。善惡相交るあり。此十人あみの常人也。

此上中下ハ人々生れ得あり他人の力を以て變化をる事ハあらび自身ふ心を励して修行をれ共下等ぜる事ありて上等ぜる事ありて是元の生れ得たる人も上等の人なれども一旦欲心ふ掩れて本心ふ暗く成り下等の人ふ似るが再び生得の上等ふ立返れるあり自身ふ心を励して惡を改むるハ是その元上等の生得ある證也と思ふ志の起るハ是そのいひ物茂卿も早くから説あれ貝原篤信が子弟ふ家則順父母ふ宜兄弟ふ敦親戚ふ在外ふ則汎愛衆ふ親仁ふ凡接人倫ふ平心和氣ふ慈愛恭敬懲忿窒慾自反衆ふ責已ふ有忍有容而居常以爲善爲樂此學者自初學ふ至終身ふ爲日用當務之工夫とも凡好善之道其所守約而所施博施之則悦者衆此可爲要道まと天下之人天爲父地爲母而爲最貴是所以爲中唯人爲最貴是以萬物之極之恩故終身之事業啻在事天地而盡其道而已矣爲仁而已矣爲仁之道在存心ふ事人道之所宜勤也史記三本之語欒共子ふ民生於三之言冝顧念之夫以天覆地載父生母育君養師導是皆於吾有罔極之恩豈可一日忘之哉といへるも共ふ大原の我ふ皇祖天神ふ出る語ふれども皆道の大本を忘れてをゐる事をぞ露知らびて皇祖天神ふも君上ふも聖師ふも坐まにおとびも大父母ふも悟らぬ説ふれぞ謂ゆる履を隔て痒を搔ぐ如ぎ譬への如くふぞ有ける

まと野之口氏の神道道ゐるべとて童蒙ふ便よく記るゐ物ふ人た本を忘れてをゐぬもの乙や此身ハ父母ぜ賜物乙や父母ぜふくて此身の出來やうヨけの乙し此身ぐ有れバおそ甘ひ物もくひ旨ひ物も見ろい物も見ろ先ぢら

しいおやめ聞な。行ぬ所へもやな。利根らしい口めきけ。此様ふ自由のるゑる。此身れ本ぬ尋ぬをば。父母でおぢる。されぞ片時も父母の事を。麁略ゟ思ふてをこのく子れ事をお窠じおちる物じや。身を大事ふかけて。上の御法度をよく守ゑ。養生して煩ぬ様ゟをるがよい。父母の有ても。君をいふもれがおくては。世を安穏ふわるられぬものじや。主人の御恩といふもれを。廣大ふもの

でおざる。父母れ御心を察して。常ハ大切ふ致に此身をも。主人の御爲ふれ。少しめ惜まば。棄てもよふるぬものでおぢる。ゑこのし死ぬばゝゑの。忠義でもおざらぬ。犬死ふれらぬ様。急度功を立て死ぬものじや。諸々の善事れ。家業ぬ精るをゆ起て。諸々の惡事れ。家業を怠るうら起ゑまにぞ。食ハ日々ふ消失せ。衣ハ月々ふやぶれ。住居ハ年々ふ傷ねよにぞ。食衣宅の三ッゟ。日月年ふ割付るもれじや。消え破をるを。足

し修(ツク)らふ爲ぷ。萬民みな家業を務えまに。それ家業といふものゞ。かゝるみ仏け合ひ。救ひあふ理(スヂ)へまねる樣ぷしゝ。大機關(カラクリ)じや。自身一己ばのまでおぢらぬ。妻子眷屬をひのへて居れバ。家業ぷ油斷をして。食衣宅ぷ逐(オヒ)のけられまじや。そおで人を助け救ふ心のない者も。知らぬ知らぢ。人を助けをくふ家業を精ゞをじや。此られおと皆。天御中主神の御靈のら出とおと。公家武家い。無理を仰せられぢ。百姓町人も。公家武家を敬ひ。上下各其職分を守ぇ。家内正(タヾ)しく濫(ミダリ)からぢ。一和して世を渡るゞ。神道でおざる」。人ぇ思ひやりのない。ゑゝし僞多い世の中心ふかおてみるごのよいじや。虚窠を正して實からぢ。るたけ人の爲(タメ)小かつてやほごのよい。欲小のゝつて。欺(アザム)れるは。恥じやご。慈悲小よおて欺れるいぢのみ恥小も成まにまい」。人の腹や。肉の耗(ヘル)のを補ひまに小。兒の中ぇ血小ぢごのぇ化(ナリ)まにゝら。生長ゞ早

い。羊を取ル(シヌガ)ひ。食物ゞ兩方ゟ分れて。血と腎水と小成まれ。そこで生長ゞ遲い。腎水ゞ溢れる樣ゟなほと。成長ゞ止ア(ヤ)まれ。ない〳〵ゞ人間の大事の場所じや。心れ(ツナ)細の取(トリ)やうで。弛(ユル)べるや淫亂ゟなア。引(キ)ぬると鬱症ゟある。先ッ身を樂ゟ持ぬと。淫心ゞのぬのる。聲ゞをアれそなほ頃ゞ。替古ぢのゆじやのら。親たちも大義なゞら。物を入れて。其ゝ者の好(スキ)と事れ中。成るけ鄙(イヤ)ろうない藝ゟ骨を折らせなほごのよい。替古事ゟ身ごの入ほと。自ら鬱氣も開な。淫心も遠ざのアまれ。まと主親大事。家業大事と。淫行ゟも。鬱症ゟもおらぬ子息(ムスコ)ぬまと親の許れ。夫(ツト)大事といふ處へ。眼(メ)ぬおけて。淫行ゟも。鬱症ゟもおらぬ息女(ムスメ)ハ。極上々れ眞人間でおぢる。」

世中ゝ有用世界。無用世界と分ておぢる。武士。百姓。職人。商人ハ。有用世界の人じや。藝人ゝ。無用世界の者じや。おくてめゝむ者の又おくてゐらぬ者じや。譬へバ有用世界の人ゝ。米。鹽。油

の類ぉくてれらぬもれ。無用世界れ人た。酒。菓
子。茶。烟草の様ぉ物で。有用世界れ人め。氣の鬱
しと時も。無用世界へ来て。氣をはらにもれじ
や。無用世界の人た。隨分有用世界の。邪魔ぉれ
らぬ様ぉもぉがよい。ぉど説(イヘ)ア。尚(ホ)委くい本書
を見るぱし。

夜曾遒久萬泥一之巻終

八十能陂寺

東京圖書館
門 類 函 架 號 冊

夜會迺久萬泥二之巻

門人 伊豫國 加藤赳仝
人 伊豫國 二宮袞校
朝臣玄道敬述

圖書

圖書

現(ウツ)靈魂の行方(ユクヘ)の事(コト)を先師の靈眞柱(タヽバシラ)ぉ。いや委(ツバ)曲(ラ)ぉ論(アゲツラ)ひ明(アカ)されて。且(ヲタ)說(トキ)ぃた。人の生出(ウマレイヅ)るぉと。ほ。父母(オヤ)ぉ始(ハジメ)め。それ成(ナリイヅ)出(イヅ)る元因(モトノイハレ)を。皇神の産靈(ミムスビ)れ。奇(クスシ)く妙(タヘ)ある御靈(ミタマ)ぉよゆて風と火と水と土。四種(ヨクサ)の物を結びおし賜ひ。それぉ心魂(タマシヒ)ぉ幸賦(サキハヘ)て。生(ウマレ)し給賜ふぉ。ぉ(シニ)ても。水と土と

た體(ナキカラ)をおアて。顯(アラハ)ホ存(ノコリア)在ほを見まば。神(タマ)魂も風と火とホ。供(タグ)ひて。放(サカ)去るおとゝ見えとアヒ。是ホ付て案(モ)ふよ。タシヒた。王(タマ)奇(アヤシヒ)火といふことれる。よ多萬葉集ホ「人(ヒト)魂(ダマ)の佐(サ)青あるし」とアて見(ミ)るも。風と火ホ由(ヨシ)アげあり。又いのホ嚴(イカ)つ。主も誰とも知らぬぞめ。結びとバえ。下の牙のつはとあはい。鎭(シヅ)魂(タマ)祭れ故事よて。いと古代の傳牙と聞も。人魂のおと。十一日の條ホ。有信云。十一日黃昏。人魂出(イデ)テ自(ヨリ)左府(ヒダリノオホイドノ)落(オツ)ル巽(タツミ)方山邊(ヤマノホトリ)ニ。其光極明。人多見(ミ)レ之(ヲ)。又見(ミ)レ之(ヲ)者。彼時男等四五人許(バカリ)居(ヰ)テ庭中(ニハノナカ)ニ全(マタク)見(ミ)レ之(ヲ)。予又見(ミ)レ之(ヲ)。但(タヾシ)不(ズ)レ見(ミ)ニ出處(イデドコロ)ヲ。見(ミ)ル落處(オツルトコロ)ヲ。と。いひ。更科日記ホ。天喜五年七月ホ。橘俊通朝臣の。信濃圖ホ下られきをるおとをいひて。此曉ほいみじく大きなる人魂の立て。京ぢまへ來ぬると語れぞ友人のホおそへよらむやなと思ひ。もゝ左樣ふ。思ひだにと見え。中右記れる。大治四年七月五日の條ホ。自(ヨリ)坊門(ボウモン)被(ル)ニ告送(ツゲオクル)ニ。其夜前北壺吳竹邊(ホトリ)ニ有(リ)ニ人魂飛(トビ)去(サリ)女房云。其色白赤丸(マロ)キ如(シ)ニ折敷(オシキ)ニ。四方之弘(ヒロサ)又如(シ)ニ折敷(オシキ)ニ。付(ツケ)テ天東行(アヅマノカタヘユク)依(テ)ニ怖畏(フイ)不(ズ)レ能(ハ)ニ見(ミ)ル始終(ハジメヲハリ)ヲ。又一人云(イフ)。妙(タヘ)其色如(シ)ニ火色(ホノヒノイロ)ニ。赤(アカ)シともいアて。ちて人魂の風ふれ。分(ワケ)て。なおいてバ。師(ノリ)説ホ見える。伊邪那岐大神(イザナギノオホカミ)の二氣ホ幸(サキ)もい賜ひ。足(タル)產靈(ムスビ)神(カミ)も。專(モハラ)と。父より受る。風火ホ付とるは。さほもれ受る。水土(ミヅツチ)ニ物ホ幸ひ賜ひて。その上ほ。王積(タマヅミ)產(ムスビ)靈(ノ)神(カミ)ほ結び付て。人と成(ナリ)て賜(タマフ)牙るおらむと

思ふ旨ありて。凡て幽界ふ付ける物も。无有ふ入りて。无に帰ると出て。人間のちざはふとおど。別ふ委く記せはものあらて。何處ぞといふふ。常磐ふ此国土ふ居るふと。古傳の趣ぢ。今ち現の事實と於考ふ渡して。明のふ知られぢめ。万葉集の歌ふも。百足らば。八十の隈路ふ。手向せず。過去ふし人ふ。けざし相むうも。と詠る如く。此顯明の世ふ。居人の容易くは。ちし定ぬ云ひがゐな事ふむ。そていのふと云ふふ。遠お神代ふ。天神祖命れ。御定はゑい。大詔命のま

ふまふ。ハ十隈手ふ隠坐はを。大国主大神の治をは。冥府ふ歸命まつれぢおあ。抑そ乱冥府と云ふを。此顯国ふ除て。別ふ一處にるふもあらば。直ふされ顯国の内。いおふよめ有おれども。幽冥ふし て。現世ぢ隔あ見えば。故もろふし人も。幽冥まゐ冥府ぢていまふあ。ちてそれ冥府ぢめた。人の所爲のとく見もはを。顯世よめた。それ幽冥を見るふと能ばぞを譬へば。燈火の籠を。白なと黒ぢれ紙もて。中間ぢあとめ分ちぞを一間ふ

おもほゆるらむ。その如くそれも闇方をこそ。明方たどく見も分ず。明方よりは。闇方を見えぬを以て。おもほゆる差別を曉こそは。幽冥は畏なおもとをも曉ねのし。

但し此を。よべ。其冥府を闇く。顯明と。幽冥の別を譬ふるはのみぞ。其冥府も闇く。顯世のみ。明なとは事ふもあらず。おもひ混ふそよ。實を幽冥も。各〻某〻ふ。衣食住の道も備へて。おのれ狀ぞ。顯世と。幽冥の故事を思ふべく。まと諸夷ふも。大倭古くも。なほを。然る事實を。現身おもあはを曉るべし云々。玄道云。そた大祓詞ふ。圖津神た。高山の末ふ登り坐て。高山の伊穗利。短山の末ふ登り坐て。高山の伊穗利。短山の末ふ別て。聞食むと見え。万葉集ふ。おとつみの邊へもおきふも。神集へ。主をきいはと。大御神等云々と詠み。寅吉物語ふ。大山小山ふ皆幽境のあるおとを語へ。源平盛衰記ある。住吉大神と陽へて出たる。開發源太夫ふ語ふも。大天狗小天狗等ふ。大小の諸山ふ分栖むちふ說も。見え。玄家ふも。抱朴子のあるおとを記せは。物屈指ふ暇あらば。其委なる狀を。古史傳を更ふて。三神山考。及附錄おはふ幽鄉眞を。語仙境異聞おどふ因て見るべし。玄道も右らむる神仙傳を集めでやと。師説ふ驚されて。皇圖を年頃思へ渡れれど。古く大江匡房卿の撰れし。本朝神仙傳ちふ物あはふ由。釋日本紀。河海抄。高僧傳。要文抄。本朝書籍目錄等ふ見えつれど。其全書を得て見つれども。ておそと希望しふ。近頃二本を得て見る上ふ。多く佛仙のみふて。いやおどけ皆抄本ある。平日の望ふ違ひ。おまと本朝列仙傳ちふ物もあれど。共ふ委のらぬ物あれど。別ふ三毛入野命。倭建御子命を初へ奉へて。近世頃まで見聞ふ及べる。神仙佛仙をも拾集めて。神仙傳記と名づけるもれ有れど。今委くをいをば。ちて人

の死ぬれば。そが幽冥ふ歸くからふ。八十の隈路、ふ隱ろし如く。何の處ふ手向して。逢ふ事くとめたまひのさかるな神代の學びを委く爲て。それ神等の。現世人ふ見えはさゐれど。今めかは。其社々ふ。御身おごらふ。隱鎭坐を事なくく辨ろて人の上を考ふれば。其理の知らはえり云々とて。龍田大神。住吉大神は。崇神天皇。神功皇后の御世ふ。御誨詰ありて。初て宮處を定て。鎭坐し事なく舉られて。おの二所の大神よ。久方遠な神代ふ。生坐る

をのく人代となりて。現れ給へる故想ふふ。住吉大神え。橘小門の。水底ふ居神と宣へれば。彼御禊の時ふ生坐るまゝふ。彼處ふ坐ましけむおと灼然きを。玄道云。此大神え。謂もはず三神山ふある。蓬萊主宰ろ給ふおとも。海中ふ幽宮ありて。大海中を總ても。三神山考え更ふて。余が集記せる物もあり。風神もしめ。何處ろ御坐處ろ定めて坐けむ。知ろ。

このら糸ど。玄道云。此師の前説あれど。後ふ此大神等の。天上ふてえ。北極邊。まる大微垣の五帝座ふ。大地ふてえ。大五嶽ふ鎭坐をよし。赤縣太古傳。天柱五嶽考等ふ。委しく攷記されるろ。上件の御代々ふ。そが宮處を定賜ふは後え。そ

の御身おのら小彼處よ移ア。今小至るまで。鎭坐におと申すも更おア。ちるを。此神々・玄の遠な神まゝ・ね・その現れ給へる時よアを。纔小二千歳ふるちばこそ前の年數小比べてそ。唯玄ばけれで。おゝを考牙て。その常磐小宮々よ。今も形を現し。神御所爲の著明なおとあア。玄道云。此大神宗像大神葛城大神・伊豆國三島かほ・伊古奈比咩神の神靈を顯し給へること小大物主小大物主今を省き於凡て前後の小注を大の略つれで。本書よ就て見べし。ちて又現身の世人も。世小居る程おそ小歸きてそ。それ靈魂やでて神小てそれ靈異おほおと。それ量々小貴な賤を。善な惡を。剛な柔をの違おそあれ。中小卓越たるを。神代の神れ。靈異おほおほめをちく小劣らば。功なれしよと事の發

らぬ豫よゆ。其事なく人ゝ悟されぞ。

玄道云。一條天皇の長德元年正月廿六日ゝ。石清水ゝ宮ゝて。或人の夢ゝ。武内宿禰命の御告ありて。天下れ疫氣尚止まぬ。此宮ゝ行幸して。御祈あらば。平ぐばしと宣給ふゝ。御卜を有つれぞ。ちふ御祈も無ゝしのた。四五月の頃疫疾殊ゝ盛ゝ行されて。納言已上ゝ薨する者八人ゝ。

と四位五位。及侍臣六十餘人あゝと。百錬抄。帝王編年記等ゝ見えゝ。太織冠公れ御像の事あゝ。

時ゝ。破裂れ給ふれぞは。正史ゝ數多見えて。聞え高くゝよゝと後白河天皇の應保二年ゝ。多武峯の御託宣ゝ。延暦興福。園城。大亂を爲をべた由。宣給ふる故。果て翌年の六月ゝ。延暦寺の大衆。園城寺を燒拂ふゝと。百錬抄ゝあり。實や山の暴行をゝ。此の應保ゝ御門の御歎の如く。いとも甚じのゝしゝと。四大寺傳記。天台座主記を見て知るべし。

ゝよゝと大鏡ゝ。冷泉院天皇の御事を申ゝて。大嘗會の御禊ゝは。そいを麗しくて渡らせ給ひしごの。其をゝ人の目ゝ現されて。九條殿ゝむ。御

後(アト)を懐(イダ)き奉(タテマツ)りて。御輿の中小候(サブラ)へせ賜ひける
とぞ。人申(マウ)し。世を見(ミ)え續古事談小。一條院の御
時小。大地震の有(アリ)けける日。冷泉院仰(オホセ)られけ
ほゝ。池の中島小幄(アクラ)を建(タテ)よ。御座(オハシ)まさむ事あ
り。仰(オホセ)られけれだ。人心得ず思ひおごのら。建(タテ)て
御簾(ミス)掛(カ)け。筵敷(シキ)などせ奉(タテマツ)る小。午時許(ウマノトキバカリ)に渡(ワタ)り給(タマ)ひけり。
其後未時だこのゆ小。大地震有(アリ)て。遲く出る人
も。打(チ)ひしぎのれけり。人々此事を問奉(トヒタテマツ)りけれだ。
去夜(イニシヨ)の夢(イメ)小。九條大臣來て。明日(アス)の未時小。地震
ある事し。中嶋小おもしほせと。告つる也とぞ。
仰せられを。聞人涙を流しけり。彼師輔大臣(モロスケノオトド)
の靈おきそひて。守り奉るおるぼうしぼよと。典藥
頭雅忠の夢小。七八歳だのみれる小童。寢殿を
走り遊びて云ふ樣い。先祖康頼。殿勤(ネモゴロ)小祈(イノ)り志
小答(コタ)ず。文書を守りて。二三代相(ハナ)離れぬ小。此
程火事あらむぞるゝ小。愼むべしと見て。其日計
有りて。家燒(ヤケ)ぬ。ちきどめ文書一巻も燒(ヤケ)ず
とぞといひ。太平記(ヲ)後村上天皇の。正平十五年

の頃觀心寺より行宮へ賊徒の北方餘騎にて寇し奉りて所々の城も落ちて天皇にもいと恐思されぬ群臣も心を傷ましめられけるに出家せむとて御暇申しに參りて通夜せしに夢にて覺めて嬉しかりしかども御告ありしのざ覺めるに信ずる者も無りしとし果して退きて歸り去れるといふかと見しも思ひ合せべし」因に云ふ大鏡に打伏の巫をいふに賀茂大神より御憑ありてもくちなの事故ぞく告知らせ賜ひて藤原兼家大臣の甚く信まれたる由を載し保暦間記盛衰記などに治承四年の頃源中納言雅賴卿の内侍不思議の夢を見る事あり大内の神祇官とおぼしき所に衣冠正しき人々多く著座せらるに末座に御しける人座をおひ立られ給ふ事にて是を何と申せだ太政入道の方人。嚴嶋明神と申せ其後上座し給ふ人宣ひけるとは預置く太刀をだ源賴朝

ふたぶるしと仰せらる。中ノ座ノ人。其ノ後ヲ我ノ孫ノ。此ノ太刀ヲばヽ給ヲほゞるしと仰らる。傍ノ人ノ問けれゞ。上座ノほゝを。春日大明神と申を見て。寤ノけヲ。此ヨ考へ合セべき事あヲど。長けヲば省なゐ。東鑑ノ。後堀河天皇ノ寛喜三年五月ノ。祇園大神ノ。或ル僧ノ御示現あヲて。六月十八日以前ノ。疫癘ノ流行るべきよし拔。豫て知らゝ免給ひつるに。果して其ノ告の如く。天下炎旱疫疾ノ。此ヲ上よいヲる。武レ内ノ宿禰命の御託ノ。ヲく似るヲ。ほゝ

後深草天皇。建長二年二月ノ。賊北條時賴ノ。妻の孕みたるを。伊豆ノ國三嶋社ヨ祈ヲしうバ。夢ノ老翁の來て。五月十五日酉ノ刻ノ。男子を產べしと宣ひつるを。果してそゝ語の如く。十五日申ノ刻ノ。漸々ヨ催して。酉ノ刻ノ男子產れつと見えぱゝ鳥羽院天皇。久壽二年の冬。御熊野詣あヲ。おはしまゝけるに。御簾の内ヨりゞ免でたき手拔出レて。二三度打返し打返して引入レけヲ。のくて七歳れる巫女ノ。御神の

託のせ給ひて。世れ未だ。手の裏を返す様ふあらむびる事を。見せ参らせおる也と。保元の大亂を。兼て知らせ給ひしふと。愚管抄。保元物語ふど小見え。闇中抄小。後鳥羽。天皇等れ。遠き圀圀へ遷幸の御ふとを申して。去ぬる二月をり以來。皇帝。並小攝政以下。多く天下を改むべきの趣夢想の告御ふて。順徳院の御夢ふ。或夜御舟遊の時。其舩覆る。或時ふと翁一人參りて。後鳥羽院。叡慮ふ。一六の由を告申ル。又七十三日小し

て天下定るべきおとふ。吉水僧正の夢小。年來薫修の壇上小馬あり。件馬。俄ふ奔出おと。依てふ僧正。向後ふ於てふ。院の御祈禱を奉仕をべのらびと。潛ふ心中小挫むとぞ。是皆宗廟社稷の示小所小非ぞやといひ。増鏡小。上皇。賊軍の攻來有る事を記して。大宮と聞召て。日吉社牙御幸念誦し給ひて。御心のちせ賜ふ。夜少しぬけ静まりて。御社をおく燈ちて。院の御前小。只よねふ小の。燼の光微のおる程小。幼ふな童れ伏ふけるして。憂牙給へだき、過しがふく侍れど。一をせ興ふとも時。情おく防のせ給ひしのだ。衆徒

己を怨みて。陳の邊小振をて侍ひしのぞ。空く馬一牛の蹄小のゝ。ひし事を。今小怨免しく思ひ給ふる小依ひ。此度の御方人へ。え仕へ奉るまじ。七社の神殿を。金銀よみのき成むと承たはも。專ら受侍らぬかひと。はゝゝ云へひ。いとも、ゝなや明月小ぞ伏しぬ。とも云ふ。承久之頃。關東之海上ニ引テ網ノ鯖魚ノ頭切テ無レ身記ふ。承久之頃。關東之海上ニ引テ網ノ鯖魚ノ頭切テ無レ身之頭。不レ知レ數被ニ引入一成レ奇ヲ之間。其ノ後軍乘テ勝ニ斬リ一公一卿以下ノ頭ヲ以レ之爲ス不レ祥ト一とも見也。

諏訪明神繪詞小。元弘二年の秋の頃。日中小僧一人。疲駄(ヤセウマ)小乘(ノリ)て。相模ノ入道高時の宿所の南庭小馳(セ)入る。館内騒動(ヒ)て。四方の門をくぎぬる連續して。馬牛の通路かし。又晝夜の警固隙かし。只事小あらぢとて。家人等中門ま

至(ヒ)て。其故を問(ヒ)れど。是諏訪大明神の御使かひ。主人小對面をべしと申(レ)けれど。唐ごのたの間小て問答(ヒ)て。神託をて謂けふた。代々當家を守(ヒ)て。久しのゆつれどめ。運命漸(ヤ)傾なて。滅(ヒ)ぢ期いたれ(ヒ)。神力も及びのゐし。明年の春夏をだ過をゐらぢ。不便也とて。涙を流して走出むをを。狂人の。怨敵の。不審かひとて。竹井入道とのやふ頒られけ(ヒ)。夢中ぬ人の如くして。旬月を送りて。彼子細を尋ねけれバ。信州伊賀ノ莊

の草庵ゝ獨住てゝ多年定座久しく侍ひたゝ今度の往復ゝ行程もゝ覺悟分明あらばとてゝ忙然とゝ翌年ゝ五月ゝおそゝ万人思ひ合せおれと見え。太平記ゝ護良親王の十津川ゝ吉野ゝ趣き給ふ時ゝ玉置荘司といふ賊ゝ距奉ててゝいや危く坐しゝゝ紀伊国人長瀬六郎兄弟のゝ三千餘騎ゝて御迎ゝ参ててゝ賊兵を伐散らしてゝ其難ゝ脱給へるゝ依てゝ何ゝ知ててゝ来きやと問ゝぞゝ長瀬畏りてゝ昨日ゝ晝程ゝ羊十四五許りゝほ老松ゝ云ふ童ゝ宮の明日十津川を御出あてゝ小原へ御通あらむずるゝ道ゝて難ゝ逢ゝせ給ひぬと覺ゝぞゝ急ゝ御迎ゝ参れとゝ觸廻り候つる間ゝ御使ぞと心得てゝ参りて候と申ゝ。宮聞召てゝ羊來御身ゝを放ゝずゝ持給ゝてゝし御守ゝを御覽ぜられゝゝをばゝ北野天神ゝ御神體ゝ。金銅ゝて鑄進らせられとゝ。そゝ御供の老松ゝ明神の神體遍身ゝより汗出てゝ御足ゝ土著るゝ。又その頃ゝ此宮ゝ御母民部卿三位局のゝ天皇ゝゝ

宮の御事を悲憂(カナシミウレ)ひて。北野御社ふ。一七日參籠
して。忘れぜそ。神もあれをも思ひ知をふ心わく
しのいふまゐの旅。と詠みて。御目睡(ミドロミ)あるし夜
の夢ふ老人の左手ふ。梅花を一枝持て。右手ふ
鳩杖をつきて。枕邊ふ立て。梅花を指おきて歸
るぬ。惟しや御覽せらるゝよ。歌を短冊ふのけ
るそ。廻り來て。遂ふ澄(スム)べき月のげのゑばし
曇る妙。何おげくらむ」とあるし。御夢ち覺て。歌れ
心を案じ賜ふふ君も還幸ぬるて。雲の上ふ住
ませ賜ふべを瑞相ありと。憑(タノ)もしく思(シ)召(シ)けるし
といひ。又新田義貞卿の北條賊を征(ウタ)むとて。出
られける時ふ。越後國ある。仝族の里見鳥山等
の期せびして皆來集(キッドヘ)るふ。其由(シ)を問れしのだ。
去る五日。御使おりとて。山伏一人。越後國中を
觸廻るて候程ふ夜を日ふ繼(キ)て。馳參(セ)るて候と
答へけるふ。義貞卿。此(レ)をるて何も告知しとる事
もれなをゑかゝほふゑぎた。八幡大神の我らを
助け給えむとてれ御所(ミシワザ)爲おらむ。と見えおと

勇み悦(イサビ)て進まれし程ぉ足利の兵も加へて。
二十萬七千餘騎集(ツド)へとあるも。大塔宮の御
事ぉいと能(ヨク)似て。皇神の御助ありつゐ事ぉ。論(アゲツラ)
ぉし。全(シバ)書ぉ後醍醐天皇を。西園寺公宗ぃの返(ソムキ)逆
て。弑(シイ)奉らむとせる時ぉ。神泉苑ぉる。龍神の御
夢ぉ入て。留め奉へ。高師直ぃの暴逆を恣(ホシイマヽ)にして。
其(ソ)ぃびむとせる時ぉ。陳中(イクサノナカ)ぉ空中をめ。旗ぇ如
へ物の落(オチ)るぉを見ぇ。元(ホ)をだ。反(ソム)故ぉて二首(フタツ)の歌あ
へ。吉野山みねのしらしぇぱぎしぇ。高(タカ)なき梢(コズエ)

の花ぞ散へもくぇぱと限へあれだ秋も暮ぬと。
武藏野ぇ草ぇみぉごのら霜ごれぉけへ」ぇ有へ
しとめ見ぇとるぃぇ吉野山ぉ坐ぇ神等(タチ)ぇ御(ミ)爲(シワザ)
ぉるぉとを。何くれと記せるを。吉野ぇ拾遺ぉ。此(コ)
奴(ヤツ)ごの吉野藏王(ザワウ)堂を燒拂(ヤキハラ)ひしごだ。或人の深く
慨(ウレタ)みて。今ぇ神力もぃ区(ウセ)賜ぇるぉやと。泣(ナキ)て打(ウチ)眠
へけるぃ夢をめぉく。現(ウツヽ)ともわく。尊體(ミカタ)の現を
給ひて。恨むぉよぃちてやぇやまむ。梓弓(アヅサユミ)のまもみ
槻(ツキ)弓ぇしぇふるとめ」と云(ト)捨て。隱賜ぇへとあ

ふよ。考へ合せて悟るばくおむ。ばゝと文錄清談ふ。多々良義弘が。足利義滿を攻むとて。住吉大神ふ詣(イノリ)て祈けるに。巫(ミコ)の俄ふ狂ひ走(ハシ)て。跳上(アガリ)跳上(アガリ)て。義弘が企(クハダ)て。香爐上の一點の雪ふ。義弘神言を聞て嘲(アザケリ)て。公ふ逆ふ心おそ。身ぬ燒(ヤ)きおごのを炎(ホノホ)なれと。繰返(クリカヘ)し繰返し旬(シバシ)ふけるふ。香爐上の一點の雪よ。大火を消(ケ)ちぞといふ事ふし。吾(ワヅカ)纔の手勢ぬ以て。京の大軍を雪解(トケ)て。火を消(ケス)の如くそ。ぬしとぞ怒(イカ)りける。終(ツヰ)に東國と。牒(チヤウ)合を事あ

(ハ)て。兵を擧しのど。あるおく打負て。戰死せるおと。應永記ふどよ。見えさるが如し。と記せ(ハ)ぬえ共ふ正し(ハ)ぬ。神祇の。豫(アラカジ)め御告(ミサトシ)ふれど。序(ツイデ)ふれぞ書つけ郡。

神代の神ふ異ふるおとれく。ちる(ハ)ぬ。菅原の神の御稜威(ミヅ)ふどを。見て知ふべし。此神の御上(カミ)を。俗の生心(ナマゴヽロ)ふる輩れど何くれと。論(アゲツラ)ひ云ふ(ハ)ぬ。凡て信ふ足らじ

玄道云。此大神の御事ぬ。師のふまゞをおばゝと御傳記略ぼゝ北野社緣起。荏柄緣起。御託宣記。靈光殿緣起。北野蓁草等ふ因て見るべし。實ふ右の師說れ如く。人の代と爲(ナリ)て。神ぬ成(ナリ)坐(マシ)しぬ。

いと多の子中ふも。古くて健磐龍命。吉備津彦命。豐城入彦命。倭建御子命。神功皇后。應神天皇。建内宿禰命。奈良別命。や、くだちて。藤原鎌足公。井上内親王。崇道天皇。伊豫親王。藤原廣嗣。朝臣橘逸勢。朝臣藤原忠文。民部卿等の靈爽かど。いや多のるをそて別ふ記し奉れる。物れ有れど。今も其他此聊語出むふ。寶物集ふ。九條右大臣師輔と。元方大納言とて。皇子の諍ひふ。元方民部卿の靈をて。御座めて。（榮華物語ふ。村上天皇の第一の皇子廣平親王の。生給ひて。まもなく。元方民部卿の女も。參て給ひて。年頃中宮も。のぬるふ。春宮のくねちせ給ひ給ふ御のとくく。惟しう心得ひ給ふ。元方云々。元方程ふ。心給ひぬ。おゝら侍ぬる事の由申して。まの御息女。たゞ給ひて。給ひぬれど。若男王生れ給ひぬるものふらど。又ふうめでさのるべき御子生給へる。世の人申思ひ。ふるほふ。一の旬ふとり。内ふも。御太刀ふり初めて。例の御ふ。元方の御ちふうけ事どもも。ふて。もて成聞え給ふ。元方の大納言いみじをおがしとて。春宮をはど世ふ。東れたしまさぬ程ふ。何の故ふ。吾ぞみお。宮ふねあやまち給むと。頼めたくれがさけて。いみぢう世中ふ。旬る程ふ。九條殿の女御。聞たべれど。元方大納言いでちてやも。前の事も漏あて。きふど。聞思ひけり。天暦四年。五月九四日

小九條殿の女御・男みや生奉ㇷ給ひつ・云々・元
方大納言のくと聞くふ・むね塞る心ちして・物
をざふも・食まし・事をもさびしく
ひつきぬ・胸をもやみじく・淺
し過ちつゞのめるのおと・物思
同心ちくていのでやをく死むと思ふぞ・きしのらし
かゆや・九條殿ふも云々・生給ひて・三月と云れぬ
小・七月廿三日・春宮ふ立せ給ひぬ・一の御子
母女御の・湯水をざふ參らで・沈みてぞ伏賜へ
る・いみじくもまよでふぞ聞召る・かくて
東宮よつふゆふしはゐ・年れ三月ふ・元方大
納言ぐれ・春宮いとうせ給ひつ・元方
あそれだ・御心ちとてもあそれ
坐しはをゝ御物のけふて・とも
大鏡ふ・此卿ま・をしげふ
條天皇ぉと小一條院をも・悩はせ奉られぬと云ふ

○夜會迺久萬泥二　十八

由を記し・百錬抄ふも・冷泉院・上皇の御事を・寛
和元年・八月廿九日・御出家・廿九・法名金剛法・小
右記云・上皇御悩・自令稱給・曰・元方卿・靈者所陳
无知・又良源僧正之靈・有含怨念事云と宣ひ・神
皇正統記ふ・冷泉圓融の兩流・のはるぞは知
らせ給ひしふ・三條院のくれ賜ひて後・御子の
敦明親王・太子をゝ給ひしが・心を逃れて・院號
蒙ゝて・小一條院と申ゐ・此をゝり・冷泉の御流
それを申をゝのゝて絶ふけゝ・冷泉
民部卿の・女御ふ兄ふて・御末も正統をゐ
奉る・九條殿の女御ふ・むのし天曆の御時・元方の
でき給ひし頃をめ御息所・一の御子・廣平親王を産
ふ惡靈ふ成りて・此皇子も・邪氣
ふ惱まされはしをゝ・花山院俄ふ世を遁れ三條
院の御目れくらく・此東宮のく親ら退き給
ひぬるめ怨靈の故ありやそ・圓融も一ッ腹の御
第ふ御坐せど・是ゐ惱ませ申ちゞけるふ
も・去のふゐをゝ繼體の・御運ましくけるふ

そと宣ふ。まさにおのこと。百錬鈔一に、條天皇の正暦四年閏十月、條小將時濟女修レ法猛靈忽出來、我九條丞相靈存生之時、或寄二佛事一、或付二外術一、懇二切彼子孫繁昌之思一、其願成就中レ就二小野宮大相國子孫可一レ滅之願一、彼時深施二外術一、欲レ斷二彼子孫一、所レ期先六十年、其驗已新、今依レ滅二他之思一受レ苦、極重拔苦無レ期、小野宮子孫、産之時吾必向二其所一妨レ事、依レ存二生心願一所レ期六十年、其遺不レ幾、彼時外術今二年許也、其後可レ難レ遁二此妨一、又此更衣已有二懷妊氣一、仍所レ來煩レ也、爲レ斷二他仝胤一者ともあり、おのの春宮とて、三條天皇小て、師輔公の濟時卿と、師尹公の子ぉるを、此は天津日嗣の御子の事よ、ぞ、起ぉれらむ、そも兄弟の際ふしくも、ぉら、のく仇敵と成られけるとぃとあさはしくぉむ、ましてぃもやぞ、元方卿の事ぉ、げふ、遺ぉ、思ぃ、御堂關白道長と、堀河左大臣顯

光とた。小一條院の女御の諍ひ、惡靈の左府と云れて御座めぉ。愚管抄、小一條院の女御よ、れるゐ、皇子を、宮よ立給ひたるゐ、小一條院ぉ。此東宮の女御よ、又顯光大臣の女を、參らせさぉぉゐ、東宮の一條院の御子、後一條院の御子、東ふ上え、我御身もてあつのれなむと思召て、東宮を辭して、院號ぉ申て、小一條院と申て、おしまして、院號ぉ申ちれける餘ぉ、御堂此をいとをしみ、もて成しぉ本の女御顯光大臣の女、え參らせられけをだ、給いけふを心うく非ぬ樣ふぉらせるとて、女子ぇ、世れ悲く思ひぉぢら、慰申さ給ふぉと申ちれけ、習ひふ候らへだ、おげろせ御火掃ふ向ひておはしけるゐ、物も仰せられぞしてぇ、小埋をけはゐ、火掃の火れ灰ぉ、志はしけるゐ、火掃の火れ灰ぉ、とおゆける、涙の落

ちせ給ひけるご。火の、ごとて。おごをはよと見て。あれ心うやと悲み深くて。やごて惡靈とおごふをゆとぞ。人をごな事あゆ。まと後朱雀院の御子小。後冷泉院をえ。まと御堂のおと女。内侍のかみ小て。參らせたるご。生み參らせられさごけきだ。やごて位ふにをうせ給ひふけるおごと顯光をえ。惡靈のおとどめよて有けるといひ。大鏡小も。志の云ひて。いみじた物小成ゆて。父大臣ぐもおてそをあごふた賜ふおれ。院の女御小た。常よつな煩をせ賜ふおゆ。尊卑分脈小。顯光公をえ。兼光公の子小て。五月廿五日薨ス惡靈大臣をえと。一條攝政伊尹(コレタダ)と朝成中納言とを。藏人頭の諍ひ小。中納言を怖(オヂ)した物小成て。一條殿の御孫を滅し給ふぞごでし。御孫の花山院も。未ご十九を申し時。修行小出でちせ御座(オハシテ)しまき。太郎小て御座せし。義懷中納言も。其歎なよ法師小成給ひまき。其弟の高賢義孝も。仝日小失給ひよけごも。愚管抄小。昔よゆ怨靈と云ふ物つ侍るを。はづ佛神小祈らるべきおゆ。一條攝政を。朝成中納言を生靈小設て。義孝少將まで。亡ぬと云めご。朝ひらた。定方大臣の子おご。宰相の時を。一條攝政ハ。下蔀小て。競望の間。放言し申しとゆ。大納言所望の時を。攝籙の臣小おらるるほを。參ごて昔よさうおく。上牙のがるおともおうをきるに。良久(サヽ)庭小立て。會呼び入れて逢れるる小。大納言小。我ら成るごなる道理を立けるを。打聞て。往年納言れ時を。放言せられま。今を貴閤の昇進。心小任せとゆ。世間ハ

計へとのさた事ぞと云て、やのて内へ入られよ
けれぞ、斜かひら〳〵腹立て、出ける車小、まづ笏拍
投られへとおもへけるを、三ッ小
れをるに、二ッ小へ
とおそ、江帥も語へけるを、三條、東洞院左、朝
成が家の跡ふかり、それ
臨まばと申さへと
病つきて、已て靈小成
ばのへれ心を起され
のばのたくてい有ら
て、此ぞう長く絶えむ、若男も女も有へとも、はへ
代々の御惡靈とおそへ、成賜ひたれとのり、江
談抄小、行成爲藏人、頭之時、依堅固物忌籠居里
亭之間、自禁中、稱大切事有召、令參上時、於殿上
俄心神失度、乍恐參清涼殿、主上先識其氣色、揚
音タソアレハト被仰、應御音稱朝成、留御簾限、
行成入御前、免此難、是則行成祖父、小一條大將、
與朝成依敵人欲陵云
とあるへ、大鏡よ、いの
ける小ろ、ちて家よ歸へ
へと云人もあ
給ひをれだ、
へ、成賜ひたれとのり、江
ろづ昔をおもし、人を用ひはしく〳〵けれ

殿の夢小、南殿の後戸の本小、人れ立とほを、顔
へ戸上小隱きて、くめ見えぞ、怪くて誰ぞ誰
ぞと、餘多とび問へれて、朝成ふて侍へと答ふ
る小、夢中よも、いと恐ろしく念じて、かどかく
てハ、立給ふと問へれけまぞ、頭辨の參るを待
て侍るかへと、いふを見られて、行成卿の許へ
消息して、其日れ參内を留免られかどして、長
く忌籠りて居られし事を記せるい、此時の事
どもや、宇治殿關白賴通、を、三條院聟小せむと仰
時左大將、
事あへけるを本の御前の親、具平親王此親王
天皇の皇子小ませ事、皇胤紹運錄かど小見え、
神皇正統記小も、六條宮と申に、中務卿小任じ
賜ひき、前中書王兼明親王、名譽おはしき、因て
是をぞ、後中書王と申、賢才文藝のへと、代々
の御迹をへく相つぎ申賜ひけへ、一條の御代
小へろづ昔をおもし、人を用ひはしく〳〵けれ

ぞ。此ノ親王昇殿を給ひし日。清涼殿まで作文あはし小所レ貴是レ賢才といふ題まで。韻を探らるに事あり。此ノ親王の御たゑかるべし。凡て諸道の小明の小佛法の方までも暗のらぢアけるとぞ。昔シより源氏多のアしこのぜも。此ノ御末のみぞ。今まで至るはで。大臣以上小至アて。相ねぎ侍ると。あアし。此ノ記を紀シ給ひてぞ坐シける。

も。此ノ親王の御後小て。既ニ小取殺さむとし給ひきを。御病付キて。大事小御オハしけれぞ。多くけ御祈ぜめ。數を盡して。驗者ふた。明尊心譽かむど。祈アて罟ふ。更ふ其ノ效ありし。陰陽師ふた。賀茂光榮。安倍吉平かむど。聲を上ゲ力を盡して。祭アけれども叶えぞ。只弱アふ弱くかめて。引入給ひけれぞ。御父の御堂殿道長公のおえしまて。我年來頼み奉る法華經れ力ふて。是レを助ケ給アをて。壽量品を。自ら一時許誦給ひて。御顔ふ當て。日本國ふ。法華經是程ま弘まる事え。偏ふ我カかめ。我子の命助ケ給へと。喚き給ひけれバ。御前小侍アをふ女房よ付キて。御舅の具平親王。物氣ふ現れ給ひて。子を思ふ道ぞちふそ侍ると。誰も子ゆ寵愛悲しきえ全レ事かアし。我墓かくれりて。便ふき自らふ。

かく辛苦(カラ)も物(もの)おもひ思(おも)たせ給(たま)ふご。悕(ウラ)めしけれど。助け難くいふ思へどとも。法華經(ほけきやう)小(を)。敢勝(あへカ)まゐらせ候て。此(この)度(たび)も先(まづ)經(ヘ)飯申(カヘリ)しあるとぞ宣ひきる。其時本の北政所(きたのまんどころ)。御迎(おんむかへ)を參(マヰ)らせ。此由(このよし)申させ給ひけれど。恩愛(おんあい)の道。此世(このよ)だのみと聞つはふ。草陰(クサノカゲ)はでも。是程淺(これほどあさ)のらば思(おも)ひけふうと。御涙小咽(ムセ)び給ふを。漸(やうやく)小諫(いさ)め參らせて。二度(ふたたび)歸入せ給ひきる。ちて御病(ごびやう)も止(やみ)給ひよけるとも。此小就ても下は見えとる師説小人靈の永く君親妻子小幸(さいはひ)ふと説れとるの動(うごか)ぬ語(かたらひ)あるおとを。辨ふべく

おそ。はと按ふ小。後鳥羽院。天皇の御靈の。後醍醐(ごだいご)天皇の御心小叶(かなは)せ給(たま)ぬ。御(ご)舉動(きよどう)あるとし故小。一度隱岐(おきのくに)國(くに)は迎(むかへ)取奉(とりたてまつ)るとも。小遁(のがれ)ては悔て。祈願(きがん)給へるに依て。再とび御位(みくらゐ)も復(かへ)し。即(すなはち)せ奉れるとも。後拾遺往生傳(ごしふゐわうじやうでん)小。死後(しごの)おもをいひて。及(および)夏頃(なつごろ)。夢(ゆめ)に。尼(あま)者(しや)。尼容儀如舊(あまのかたちありしがごとく)佇立(たたずみ)戸外(とのそと)小。女子(をんなご)曰(いはく)。常(つね)小致戀慕(こひしたひ)坐(ます)何(なに)處(ところ)乎(や)。尼答(あまこたへ)曰(いはく)。吾(われ)爲(ため)小護(まもり)汝(なんぢ)等(ら)時々來臨(ときどききたりのぞ)此處(このところ)と云(いふ)。ほおとをも考(かんがへ)合(あはせ)にちれば。神明(しんめい)の御上(おんうへ)とも。程々小付て。正(まさ)小祀(まつる)も。申(まうす)も清(きよ)き心もて。更(さら)とも。祖先(そせん)の祭(まつり)ほべおわざおかめざ。祖先の記(しるし)よ。供(そな)へ奉(まつる)事(こと)也。供并日之食(そなへまつりひのけのしよく)も。祖父母(そふぼ)は菓子(くだもの)并一飯(いちはん)も供(そなへ)ふる也。明德是(めいとくこれ)馨(かうばし)と云へり。只以(ただもつて)懇志(こんしを)爲(なす)本(もとゝ)也。されだ黍稷香(きびあはかうばし)小あらば。神靈(しんれい)も。いのれる水草(すいさう)も。菽麥(まめむぎ)も。只其志(ただそのこころざし)小誠(まこと)おれば。神靈(しんれい)も。饗(うけ)給ふおとおわり。人も如此(かくのごと)哉。うつくしく。奇麗(きれい)の物(もの)おれども。い

たく惜げ小てあとへて。其心も打解ぞや侍らむ。比興輕微の物體も隨分の志を現せバ。納受めでゐくおそと宣ふて。仙境はと大鏡異聞ふる説小。符ふるはゝよ引つ。小。藤原誠信卿ゑ爲光公の太郎小て。三十八小て。惡心起して。込賜ひし有狀ゑ。いやゑ淺ましの。とし事ぞのし。第齊信卿の越て。中納言とふらいつるゆ恨みて。いの小我よ向ひて。有まじた由を云て。謀をけるぞと思かによ。いやゝ惡心起して。除目の朝をめ。手を強く握とて。我を齊信道長小。沮はもぬるぞと云ひ入て。物も參らぜう於伏賜へる程小。病づなて七日と云ふ小。失せ賜ひし小。握給ひるとけるおとびた餘とつよくゑて。上よおそ通とて。出給へとけれ。仝裏書小。長保三年八月。齊信越兄誠信。任權中納言。千時誠信。參議從三位。仝九月三日。發惡心卒。年卅八と見え。寶物集小め。誠信の君ゑ。臨時客の所小て酒よ酔ひて。弘高の繪ごのける屏風小。物をつきのけて。其事故小中納言をぞ。第の齊信の君小越られ給ひ。現世よ猶崇小成まとと

云ひて手を強く握めて云々とあるも忠文卿も事小さく似るひて日本運上錄小正中二年。六月廿五日於大覺寺御佛事仙洞被取行剋俄大風雨降人屋多損流殊更山坂本千餘人流失云東山禪律寺々京白河人屋損失不知數雷蹴殺牛馬此併後宇多法皇御忩也とあり此も天皇年代略記かど小元亨四年六月廿五日大覺寺小て崩坐し由見也はと源義平れ難波經方ひつぎれ事小因ての御忩小や有けむ

波經方ひつぎれ事小因ての御忩小や有けむ。皇年代略記かど小元亨四年六月廿五日大覺寺小て崩坐し由見也。はと源義平れ難波經方ひ於る。源義興朝臣の畠山江戸等を誅

れとひ。一色義貫ご足利義教ひ殺され。佐竹上總ご足利持氏小戮せられて。共小崇を爲とひ。諸家大祕錄とひ。今川義元ご織田殿を討込さむとて。永祿三年五月用意ひける頃義元ご兄る夢ともあく現ともなく義元ご枕元ひ顯れ出て杖小てつき歎小古ヲ世を去ひとし良眞ありめやごのつでと小て枕本小有けるさひて汝勇將の名を施をと切れご良眞飛去いへども欲心を專として一生の行迹非道小て武運盡なば命亡びむ事近き小在ひて我此をご告知らせむご爲小來れひといふ物小今川義元ご眼ひ剛強ある人あれご爲ひて敵あひて猶も切付むとそれご良眞重ねて。

我汝ゐ深き恨有りといへども。今川家の滅亡せむ事れ悲しけれよ。汝ゐのくて知らをはぞとて。忽ち姿を消失ぬといひ。ほと駿河の鎭守總社の山ゐ古き白狐の社壇ゐ死居り。其頃町人の諺よ。いふ歌のはやよ。又今川氏ゐ眞範といふ僧の靈ありて。惡しかるみのてぞ哀しかりけるを。義元阿部川まて。それと覺しき者ゐ逢ひをるゐ。果して織田殿の爲よ。鳴海掃部の間ゐて。滅びたよをかどもも。尚委くをるせよ。

近くを伊賀圀愛田村をは。山伏大藏ごの靈同圀小泉某ごの。伊賀守定次ゐ祟り。其爲し。周防圀岩圀ゐる。吉川廣正ごの家人。杉岡某ごの讒死ゐ因て。冤魂の祟れるを。杉岡八幡と稱ひ。伊豫圀宇和嶋かる。山部某ごの。忠誠ゐて殺されしを。和靈社と祝れ。江戸かる。根津某下總圀かる。公津某土佐圀かる。僧君敵社の事かどをも。思合をべくかむ。或人の語ゐ。兩部神道者の流よ。法性有覺邪迷と。三種の神靈を立よと。法性神とを。天神七代の如き。造化神を祭よ。有覺神とを。人の靈魂を祭る。八幡宮天滿宮の類を申し。邪迷神とを。松浦新田明神の類をいふと云へるを。佛法ゐ謗ずるおとを勿論あれど。理をもあるべくや。

其そのを大圀主大神の隱坐つゝめ。侍居賜ふ心ぞへよて。顯世を幸賜ふ理ゐひとしく。君親妻

子ま幸ふさいとおもひ。そこ黄泉へ往のぞバ何處小安在てまこのほと云ふ小。社はまと祠おどを建て祭りあるこ其處小鎭坐れども。然在ぬい其墓の上小鎭居ア。されこまと天地と共小窮盡る期おまさいと。神々ま常磐にそ社々小坐ひと仝ごきれア。ちて墓所小葬ぎをも鎭坐ぞと云へる例ま。倭建命の崩坐て。伊勢の能煩野小葬奉アしを白鳥小化てア飛翔行て。河内の志幾ま留賜ひしのぞ。其處小め御陵ま作りて鎭坐也とおる。此こ御靈ぱ其所小留奉アしぷて。そ後て古への墓所をのはふるこそれ魂ま。其處ま仰留めむとの事おるさいとさいれ倭建命を。始め能煩野小葬奉アしぞ。それ御陵を作飛行し故。はまとその行留賜ふる處々小。御陵を作れるふて曉るぞし。はまと此御子の后第橘比賣命の海小入坐ふへを。その御櫛を。神濟の原也。神葬奉アしことを。言さへぐ。百取て。御墓ま作ア。納めまと留めむとてふり。はまと万葉集ま。高市皇子命を。葬奉アしことを。詠るも。墓體として。それ御魂を。常宮と。定奉りて。神小葬むる例ふて。安定坐ぬ。と詠るも。墓小葬むる例ふて。安定坐ぬいへる例まて。古意小叶ア。此類ひの歌万葉集ふいと多のぼを。今こ其一ッを擧げつるまゆ。ちてかく上代

とて葬所を。その體を隱し。はゐそれ魂を鎭む料
小。搆ふるもの故。吾も人め。死をバ其魂を骸を離
れつゝめ。其上小鎭坐るかとさておそ。諸夷も大
倭も。上古小め今世よも。人の靈魂は墓上小て。靈
異を現したるかと。數矛も盡されぞ。その古きを
徳天皇の御紀小。上毛野君田道。蝦夷のためは軍
を敗られて死けるが。蝦夷人どもの。其墓を堀け
る時。大蛇と化て。出て目を瞋らし。蝦夷人どもを
咋い。毒氣を被らせける故。時人の。田道雖既。遂
報讐ア何ソ死人之无レ知ラ邪。といへとあるをも思ふべし。とゐるを。いと〳〵感
とく。おむのしを語かとをきめ。ちるを或神人を。凡

て人靈は墓上小居るをいふを。非說かとと宣ひ。
幽顯問答かも。或墓の神と祭られてを。墓上
ハ汚穢て居るかとへぞと語れるかと見も。ある
大神を。此を夫人小因て。墓所を嫌ふもあとはと
嫌をぞて。住居るめりをぞ。恐けれど
此御詔かも。師說小能符合て。實小然有むと覺も
ゐ由を。先師も論をたる如く。仁徳天皇の御世小。
倭建皇子命の山陵守を。廢むと爲給ひける時。陵
守目杵ちふ人の鹿を化とて。幽界小歸入とる神
異を示し賜ひ。此を實の山陵ぃあらで。假小御
陵とし。崇奉とを給へることと。のれ

伊邪那美大神の御と申傳ふる處は靈威あらし
さと小齊くて御陵とて崇奉れざやのて御靈鎮
まれといふ左仲哀天皇の神功皇后れ御夢小御
券と爲べし仲哀天皇を長門国とあ河内国古市郡
託ありてそれ御陵を長門国とあ河内国古市郡
壺井郷かる地小遷さし免給ひ此七通法寺記小
小惠我長野西陵穴戸豊浦宮御宇仲哀天皇在河
内国志紀郡兆域東西二町南北二町陵戸一烟守
戸四烟と見え前皇廟陵記小見えとあ諸陵式
西陵今在上原村といへあ神功皇太后れ御陵
の神靈七殊小多く聞もるを聊申さざ仁明天皇
紀小承和十年四月己未朔楯列陵守等言去月十
八日亥時山陵鳴二度其聲如雷即赤氣如飄風指
離飛去申時亦鳴其氣如初指兌飛亘遣參議正躬
王加檢察伐陵木七十株至楛木等不可勝計使即
勘當陵守長百濟春紀上奏矣よと四月己卯使參
議從四位上藤原朝臣掃部頭從五位下坂上大宿
禰正野等奉謝楯列北南二山陵云々水左記小康
平八年六月廿三日經信朝臣下石清水宮文を載
て神功陵振動者令神祇官陰陽寮卜者仝仰辨神
祇官陰陽寮著座了卜書令上了宮寺緣寺抄小長
治二年十一月十七日戌時男山鳴動又神功皇后成務天皇兩山陵
鳴事歷代皇記よ天仁元年八月十五日成務天皇

神功皇后陵、鳴動、事有リ御上ニはと天承二年正月十二日秋篠ノ山陵鳴動ノ事と見え。雄略天皇の九年七月。應神天皇の河内ノ山陵ニて。古市郡ある。書首加龍といふ人の。神異ニ逢ヒとる事を。御紀ニ姓氏錄ニも紀され。一代要記ニ。後冷泉院ノ天皇の治暦二年三月廿八日戊ノ剋河内ノ圀譽田天皇山陵震動放レ光ヲ扶桑略記ニも。治暦二年四月廿五日石清水ノ宮司言上ス去月廿八日戌ノ剋河内ノ圀譽田天皇山陵震動放レ光ヲ之異ヲ也。また宮寺緣事抄ニ。康和四年九月廿九日譽田天皇山陵震動如レ雷事とあヲ序ニ云弘安四年西琳寺ノ一山陵ノ振動ハ限レ譽田陵ヲ依テ爲ニ大神靈廟ニ去レ寺ヲ一下レ官符ヲ被レ止メ殺生ヲとふ事ありはと万葉集代ノ町とも北ハ限レ譽田陵ヲ賜へる太政官牒ニ。とあり。はと万葉集代ノ近記ニ。雄略天皇の御事を申して。崩給ひて。翌る年ニ至て。河内ノ圀丹比ノ高鷲ノ陵ニ葬め奉る。今多治比村の西黒山村の東ニあとゆて陵ありこれ。おるべし。五十餘年ぬさたかや。小澤氏の何某彼ノ陵をのぞきて。大ぬかる巖のこのはへあヲけるをば。坂東の故郷の庭ニをゑ物しけるの程ぬく何の故もかくて。自殺しけるとぞ。かれあとヲの土民の語ひ。冷集解ニ引る古記ニ。此天皇の崩て七日七夜古禮を仕奉て後禰義余比ちふ二氏の絶る事の有ヲしを仕奉らげヲし因て荒び賜皇廟陵記ニも思合せ奉るべし因ニ云前利休が竊して己の塔として聚光院ニ建まと石

の穿てるを窈めて取り來て茶寮の洗手小供ふ此時大亂始て平法綱甚疎かゝしのだ幸小刑を免れたのど後罪を豐臣氏小獲て自殺ん實ん天誅小伏をるあり國史略小憶取陵上石與取長陵一坏土者全其罪不免誅如彼自殺可謂天幸甚矣且小技中可笑者莫甚于茶識太宰純著春臺獨語極口毀茶論駁痛快不遺餘力といへるが如く世小茶香ま恥る人の神明れ如く言噪ぐ者かるを、のゝ虐罪を犯せるとも天智天皇ゝ光孝天皇醍醐天皇ゝ山陵の御崇有しかと長秋記の長承二年九月五日條小云く忠宗卿ト居於山階朝暮往反件所近天智天皇山陵定經廻彼莊之間自然致無禮歟偏依此崇德去所令存也愚思件人與彼山階論田畠云不可然所聞也小野齋尊僧都住醍醐山陵傍依其崇死去仁和寺覺行親王堀小松山陵有崇德遊彼時民部卿俊明卿夢有行幸恠問人答云小松帝依被破山陵參大神宮被訟申蒙裁許所還御其執人可處死刑夢後不經幾程薨給云如此於山陵邊令致無禮自今以後可懲心事也とあり。

覺行法親王ゝ皇胤紹運錄ゝ白河院天皇の皇子小て三品號中御堂といひ今鏡小三條院天皇の御子大御堂師明親王の御弟子小て初めて法親王と申ゝ號を得賜へる由記し仁和寺御傳小長治二年十一月十八日御入滅三十一とあり又た いのある御過小て御陵を犯奉ゐ給ひけむそを

彼ノ天皇命ノ御怒ノ餘ヒ小伊勢ノ大御神ノ神廷小訴ヘ申シ給ひて、それ御許を受て、さて理の如く罪し給へるかぞ有ける、いとのしこたや、尚此た委く中ニ右ニ記かも見えたるを、道のたはべる云ふを見るぞし、東寺私用記小引る。源運記小、平城天皇捨テ春宮ヲ親王ニ内々密事可レ譲ル王位ヲ眞如親王小ありヒ、云。於レ是清丸參テ春宮ニ一一奏ス此旨ヲ春宮驚參詣テ桓武天皇御廟ニ七日七夜訴ヘ此事ヲ七日之内ニ天下無ク晝夜如レ暗夜ノ、公家驚テ之召ス諸道勘文ヲ仝ク申シテ云ヒ付テ王位ヲ日本國大小諸神ニ平城天皇ニ王位ヲ讓リ嵯峨ニ於レ親王ニ令レ補セ春宮ニ新院ハ住ニ大和國ニといふ事見え。此た水鏡愚管抄ふもあれど、今た委きを付て、此を引るかも、おゝ小清丸ハ卿と有るゝい、決めて誤りて、坂上田村麿卿のおと等を混へとるふやいちて、崇道天皇井上内親王等の山陵の御祟の事た、別た記奉れる物あるおと、已小云へヒ、靈異記小長屋親王の御事を、聖武天皇勅テ捨テ彼ノ屍ヲ散ニ於城之外ニ而焼キ末ヲ散シ河ニ擲リ海ニ唯親王骨ヲ流シ于土左國ニ時ニ其國百姓多ク死ス去ル百姓患テ之ヲ而解テ官ニ言ス依テ親王氣ニ國内百姓可レ皆死ニ尽ス天皇聞テ之ヲ爲ニ迫ニ皇都ニ置ニ于紀伊國海部郡ノ椒ノ奥嶋ニと云ヒ。因ニ案ふ小、此天皇、まと孝謙天皇の御代の、甚じた禍ノ亂の起ヒしたゝ、親王の、御祟ふぞ有ヒけらし、はと白峰寺の緣起小崇徳天皇の御事ぬ委く申テ實

小大魔王とめからせ給ふやらむ。今も御廟所小
て。番の鶏とて。毎日一羽祇候するあり。のれ野澤
の井邊小。社壇を搆て。天王の社を申侍り。正面内。
客人小い。爲義爲朝父子の影像を作りてあり。平家
西海小漂ひしるも。彼怨念からびやまと仁安元
年十月の頃。西行法師。四国修行れ時。彼廟院小詣
でゝ事をいひて。御廟震動して云々。とし君。む
のしれ王の床をてめ。かゝらむ後を。何よのたせ
むと申しとりきをば。御納受もや有けむ。度々鳴動
した〻とあり。但し緣起よ。松山の波小流れて。あ
し舩の云々といふを。御製とせる
た悞ふて。此た西行僧が小て。山家集西行物語よ
見も撰集抄ふも。新院の御墓所を拜み奉ちむと
て。白峰といふ所よ尋參り侍りし小。松の一村茂
れるほとりふくぎぬなしはえしとり。是かむ御
墓ふやと。今更のきくらされて。物も覺えび。まの
あとり見奉りし事ぞこのし。清涼紫宸の間よ。やを
みゝ給ひて。百官小いつのれさせ。後宮房のう
てゐよゝた。三千の美翠れのむざし鮮ゃ小て。御眸
ふの、らむとのみ。ゝ方機れ
の政を掌ふ握らせ給ひしぞこのし。春え花れ
宴を專ふし。秋え月の前ふあれふのみふのらび。春え花れ
思ひきや。今のゝほ夜ふもの興つきせび侍りた。豈
他國邊土の山中れ。おしとた。のけても謀りたや。
ふべしとは。云〻とて。右の歌を載とり。ちて此天
皇の御崇小因て。世えひと亂を小。亂來し由を。先

師の論れるは。實ふちる説(コト)るに就(ツキ)て案(オモ)ふ。はと後鳥羽院天皇の御靈も。相加(アヒヅ)えて賜ひけむを覺もる事。御靈告記ある。御誨ふ見えとはなくあれだ。今序ふおの二柱天皇の。御崇(タヽ)りとし事を。少記(イサカシル)さむふ。はづ吉記壽永元年八月條ふ。證遍已講(ニ)來談(シテ)世事(ヲ)云(ク)。夫擾亂(バ)全(ク)非(ス)他事(ニ)。宇治左府怨靈所(リ)爲(ス)也。讃岐院。知足院入道殿。相加(バリ)給(フ)歟。於(テバ)法皇(ニ)者。度度雖(モ)令(メ)逢(バ)其難(ニ)御(ス)云々。二條。六條。高倉。三代帝王(モ)早(ク)以(テ)遷化。建禮門院。六條攝政。全(ク)歸(レ)泉下(ニ)給(フ)。皆是(レ)彼靈令然(ムル)也。近年之間。連々夢想。非(ス)無(キニ)其證。此事上下雖(ド)知(ルト)此由(ヲ)。未(タ)及(バ)其沙汰(ニ)也。猶任(カセテ)北野之例(ニ)。可(キ)被(ル)祝(ハ)神歟。予答云(ク)。先年有(テ)其沙汰。讃岐院被(レ)行(ハ)八講(ヲ)。左府被(リ)官位(ヲ)了。其時神祠事。有(ル)沙汰歟といひ。王海の全二年閏十月朔條ふ。光雅卿仰云(ク)。天下亂逆連々無(レヤム)了時。是(レ)偏(ニ)爲(ル)崇德院怨靈之由。世所(ク)誕奇(ト)也。仍(テ)可(キ)建(ツ)神祠(ヲ)於成勝寺中之由。叡慮一決(ス)。仰(セテ)彼寺行事辨光長(ニ)。有(リ)其沙汰之處。猶(ホ)有(テ)御恐懼。去頃(コロ)被(ル)訪(ハ)占者(ニ)之處。占趣太(タ)不快(カラ)云々。まと東鑑。文治元年九月四日。下ふ。勅

使江判官公朝歸洛ぷ依テ去レ七月大地震事ぷ且被レ行御祈ヲ且可レ被レ滿遍徳政於天下ニ事ぷ並崇徳院御靈殊ニ可レ被レ崇之由事ぷ被レ申ニ京師ニ是可レ奉レ添朝家寶祚之旨ぷ二品御存念甚深之故也はゝ十二月廿八日ぷ御臺所ニ祇候女房下野局夢ニ號景政之老翁ぷ來テ申ニ二品ニ云ぷ讃岐院ぷ於テ天下ニ令レ成崇給吾雖レ制止レ申不レ叶ぷ可レ被レ申若宮別當者ぷ夢覺畢ヌトいひぷ吉記ゐぷ壽永三年ぷ四月十五日ぷ今日崇徳院ぷ宇治左大臣ぷ爲ニ崇靈神ぷ建ニ仁祠ヲ一有ニ遷宮ぷ以テ春日河原ヲ爲ニ其所ぷ保元合戰之時ぷ彼御處跡ニ

也を見え。おゝ御正体の御物等の事をも。委く記され。愚管抄ゐぷ元暦元年ぷ四月十六日ゐぷ崇徳院ぷ並ゐ宇治贈太政大臣の。寶殿を作ゐて。社壇を春日河原ぷ保元戰場ゐ占られて。範季朝臣奉行して。靈蛇出來さゐぷ又預ゐされるゐぷ神祇權大副卜部兼友ぷ夢想あゐむどきゝえき。此事ぇ。未曾ぇの法住寺軍の事ぷ偏ゐ天狗れ所爲かゆと。人おもへゐぷいふにも。此新院の怨望ゐど云事ゐて。忽ゐ此事出來ゐけゐぷ新院の御思ひ人の烏丸殿とて有しぷ未ざいきたゐけれぞ。其め

御影堂とて。綾小路河原ある家ゝ造(ツク)りて。ぢるし
ぞめなりとて。やう〳〵れ沙汰もあるなり。正海五
月十三日條ゝ云。式部權少輔範季。語崇徳院廟遷
宮之日。蛇出來。並夢想等之事。範季並俗別當兼友
等(ドモ)。同夜有嚴重夢想云々。保暦間記よも。北條賊臣
まづ義時一人が謀ゝ押(オシ)謀らひ申て。今は王法形(カタチ)
岐院の御靈とぞ。天下の
人ゝ申しけるといへり。明月記の。嘉祿三年七月
十一日記ゝ。近日天狗狂亂殊甚清水鐘樓之下ゝ。
白布もて。法師一人縛(シバリ)付て有る故。見出(イデ)て聞とる

ゝ。伊勢國人ある。もや山伏体(テイ)の僧ゝ伴(トモナ)れて。
大内を始て。法成寺。法勝寺を見あどせとは事れ
どを語る中ゝ。崇徳院。當時御(ン)鎌倉。竹中僧都
參(ル)隱岐之嶋(ニ)とあり。古今著聞集ゝも仁治の頃伊
る法師上(ヘ)て云ゝ(シ)載(ル)せれど(サ)ゝ異(ガ)同
の死(シ)るに因て。細川顯氏の子繁氏ゝ伊豫守ゝ
爲(ナシ)て。九國の大將ゝ(シ)て下(クダ)しけるゝ。はづ讃岐國
へ下(ク)へ。兵船を揃(ソロ)へ。軍勢(ゾク)集(ツド)る程(ホド)ゝ。延文四年六
月二日。俄(ニハカ)ゝ病付て。物狂(ト)ゝ成(ナリ)さゆをはぢの。自口走

ヲて。我ト崇徳院ノ御領ヲ落して。兵粮、料所ヲ充行ひし小依て。重病ヲ受さめ。冷した風ヲ向へども。盛りある炎ノホノホの如く。冷スヾのある水ヲ飲メども。沸返るユ湯ヒ如し。あら熱アツや堪タヘ〻ざや。是レ助けてくれよと悲みカナシ叫サケびて。悶絶倒しけれバ。看病ヒヤウ者どめ。近付むとするに。四五間の中ヲ。猛火の盛リ小燃モエるヤウ様ヲ熱ネツして。更小近付ク人も無ヲけり。病ヤミ付ツキて七日小當アタる卯刻ヨ。黄キあるハタ旗一流差サシて。混ヒタ甲の兵千騎許リ。三方ヲ取ヲ全一時小。時ノ聲ヲ揚アゲて押レヲせるヨ。誰と

ヲ知らぬ。敵アダ寄ヨせと心得て。馳集ると小兵五百餘人。大庭小走出。散々小射る。箭種ヤダネ盡ツキぬれバ。打物ヲ成て。追つ返しヲ。半時許リぞ戰タヽカひける小。搦カラメ手ヨり。紅の母衣ホロ掛ケる兵十餘騎。細川伊豫守ノ首クビと。行吉掃部ノ首ヲ取て。鉾小貫ツラヌキ。惡ニクしや思ふ者をぞ。皆打取ると。首ヲ取て。二首ヲ差上グるをば。大手ノ敵ヲ。百餘騎。勝時ヲ三聲ヲつと作ヲて。歸ルを見れぞ。此寄手天小上ヲ雲ヲ乘て。白峰の方へぞ飛去ける。後小防フセギつ者ども。討れぬと見えつる

人も死ぜ。手負と見えつるも恙かし。暫しあれだ。
伊豫守も行吉め。仝時ぶ墓ぬく成ぷぶけぷ。とも
あゆ。「大神の御稜威よ考へ合ちるゝ由。論れとる
如くぶて。騰雲物語よも付ても。思合せらはゝ去とある故。
氏の系の事よ付ても。思合せらはゝ去とある故。
別ぶ記奉るぼゞれ
だ。此ぶも畧きつ。ちて岡屋關白兼經公記ぶ。
後深草天皇ぬ。寶治元年。三月廿七日。條ぶ。依召午。
時許參院前。太政大臣。並余候御前。大相国密々申
云。後鳥羽院御靈。託事伊賀局平生。御愛物龜菊也。申。我沒後。
必可行所思。如然之時。人定如崇徳院。致沙汰歟。今
非所願可申止也。是令託伊賀給而清房入道傳申
相国歟と見え。歴代皇紀ぶ。仝年四月廿三日。奉崇
祝後鳥羽法皇聖靈於鎌倉雪下。號新若宮。三箇日
奉神樂。是去三月一日。將軍室早世。病患之間。有種
種託宣之故也。東鑑ぶも。四月廿五日。奉勸請後鳥
羽院御靈於鶴岡乾山麓。是爲奉宥怨靈也。以重尊僧都補別當職。といへぷ。見聞軍抄
ぶも。天皇崩御の後。御靈光物と成て。虚空を變耀
し。人民を惱まし。都鄙安らぢ。是ぶ因て。鶴岡の
乾の麓ぶ。一宇の社壇を建立し。天皇を勸請し奉
ぷ。新宮大權現と崇ぬ。重尊僧都を以て。別當は補
し。御怨靈を和ぬ奉らる。是ぶ因て。天下の怪異も
靜ぷぬ。ちれどめ。それ怨靈止ざるぶや。其後の御
託宣ぶ。關東滅ぶ去ぬ。我ぶ所爲ぶぷ。關東滅却も廿

二日、朕の崩御も此二日と、詔へ玉へと云、はた、御靈告記よ因て記しつるなり、五代帝王物語小、後堀川、天皇の、中宮藻壁門院小次ぎて、崩御あ玉し事よ申して、代々れ帝王、短祚よおたえし、坐例の多のれども、女院の御事小打續よ、此事れ出來ぬる、子細あ小、事かり、皇代記、皇帝紀抄かど、亥刻に崩、年廿三、増鏡よ云、世のおもし小ておたえし、坐をべき事の、かくあるまじきなり、大のと御本性も和やの、ど聞もるめあの免なう、ようら〳〵云く、御貌もまは小美しく、やゝのかて、玉のう盛玉れ、御程小、御ざえおども、倭もろ、おしとど〳〵云のらぢ、何事小付ても、いとゝ、らしくおそしはせバ、世人の惜み聞もるちま限り、あし、只くれ惑へる心ちどもおて玉、古宮の御たて、ざ、よをぎバ、又と玉重ねて、諒闇の三とせはで小、成むおとを、いとまの〳〵しく、もいしと、皆人思ふぼし、後鳥羽、院の御怨、十樂院、僧正等ぞ、所爲小やぞ申、あひける、はゝと文永七年の頃、後嵯峨、天皇の、五十、御賀の行たえはべのを、蒙古賊の事小因て、止るおとをいひて、御賀を後鳥羽、院御心小、このけさせおたしとを、れども、空く止小けり、ちれぢ免ざはしく思召バ、いのにもあられまじき由、御託宣有けるとも聞えしかば、ちやらむ、ちらぬ月日も多のは小、異國れ事いでなて、今

少しを待(ま)ちけぞ留(とど)られふし返(かへ)しくおいおく
侍(さぶら)ひきと云ひ仝九年正月十七日ふ仝上皇の嵯
峨(さが)殿へ遷(ウツ)らせ賜ふ事を記して仝今日も別勅ふて。
帥(そち)中納言經任卿。後騎小仕へ奉(まつ)りて。御水(ミツ)瓶(カメ)の役ふ
どめ勤(ツトメ)ける。又路ふても聞召む料ふ。御水瓶は煎(セン)
物を入れて。持せられきるご。中御門大宮へ。御輿
かきすゑ。參らせむとせれど。御煎(セン)物心うつくし
く。一滴も無(な)く匕(サジ)ふけるおそ。實(ゲ)ふもあぎは覺(おぼ)え侍
ひし。増鏡ふも。龜山殿へ御幸ある。此やのぎひと。
上下心ぼそし。法皇も御輿ふめ。兩女院も例
の一つ御車ふたてはつる。徼ふ御匣どの侍ひ給
ふ道ふまねるゞな御せんじ物を。胤成師成といひ
ふ藥師どもゝ御前はてゝ。ためよしの中納言
れて。ためさゝい免て。銀の水瓶は入
ふふ持せさひけるを。内野のほどふて。參らせむ
とて。召(めし)るゝふ。ふの砌ふ露かどもおし。いとめづ
らのふ事ふめり。ち程の大事れ物をあしく持ち
て打ふが様え。いのでゝあらむ。法皇もいとゞ
御れく病そひて心細くおがさけひ。とあ
ひ。げかめづらしく。もいしき御兆はおそ。後鳥
羽院の御所。嘉陽院殿。跡。中御門西洞院を。經任卿
給ひて。花亭ふ造(つく)ゝさひしらぞ。常ふ御幸有ひしふ。
後鳥羽院の御靈。御心やをけぬふて有(ある)けるやらむ。
其(そ)效も有(あ)けふとのや聞(キコ)えし程ふ。御惱(ナヤミ)のかど冷

泉殿の内。弘御所小。大臣達の參りて。候ふ程の座
さきに。おえらの小。も、しき僧の著坐ゝされぞ。
誰小のと思ひて。誰ゝの御參りと申候ゝむぞと。女
房の問をれどめ。返事も無けきぞ。非目のと思ひ
て。又女房を遣ゝして。二人して問へどめ。更小答
へもせで。そをきくらひと失小けり。不思議小ぞ
有りきるといひ。明月記。正治元年九月十二日，條
所召仕之女房。号信濃。信云。龍壽御前。今日物語。其次云。
南細所而有怖畏之氣色。依奇思強問之間。語云。去年
入彼細所之間。全形寸分不違物六人并坐與我問
答。其詞之内。我約束云。奉爲御所。不成凶。不奉散。被
坐此所者。大炊殿東有寄，何事在乎。全不可語人申畢云
云。但非法師非尼非兒之由稱之。云々。所推量人ヨ
リハ小物歟。雖極不審。不語之間。力不及。抑件之女
房。雖如泥尾籠。不好虚言。仍所信受也。又云。總彼御
前。於事有如此之聞。院御所之時。女房等見尼。成怖
畏云々。又齋院先年。御寢殿之時。女房周防有驚事
申。其事之後。不御寢殿云々。殿下御坐之時。又女房
時々。稱怖畏之氣云々。民部卿參間。爲謁周防在簾
中之間。尼來坐傍。故別當殿來由不驚。又見遣之時。
忽然不見。御所とハ。後鳥羽院。天
皇の御所の由。全じ附錄小見也。太平記小。雲景と
いふ山伏が。異人小伴れて。愛宕山小行なて見
ほよ。崇徳天皇。後鳥羽天皇。後醍醐天皇たちも。天
下を亂るゞな評定あゝしと見え。後土御門天

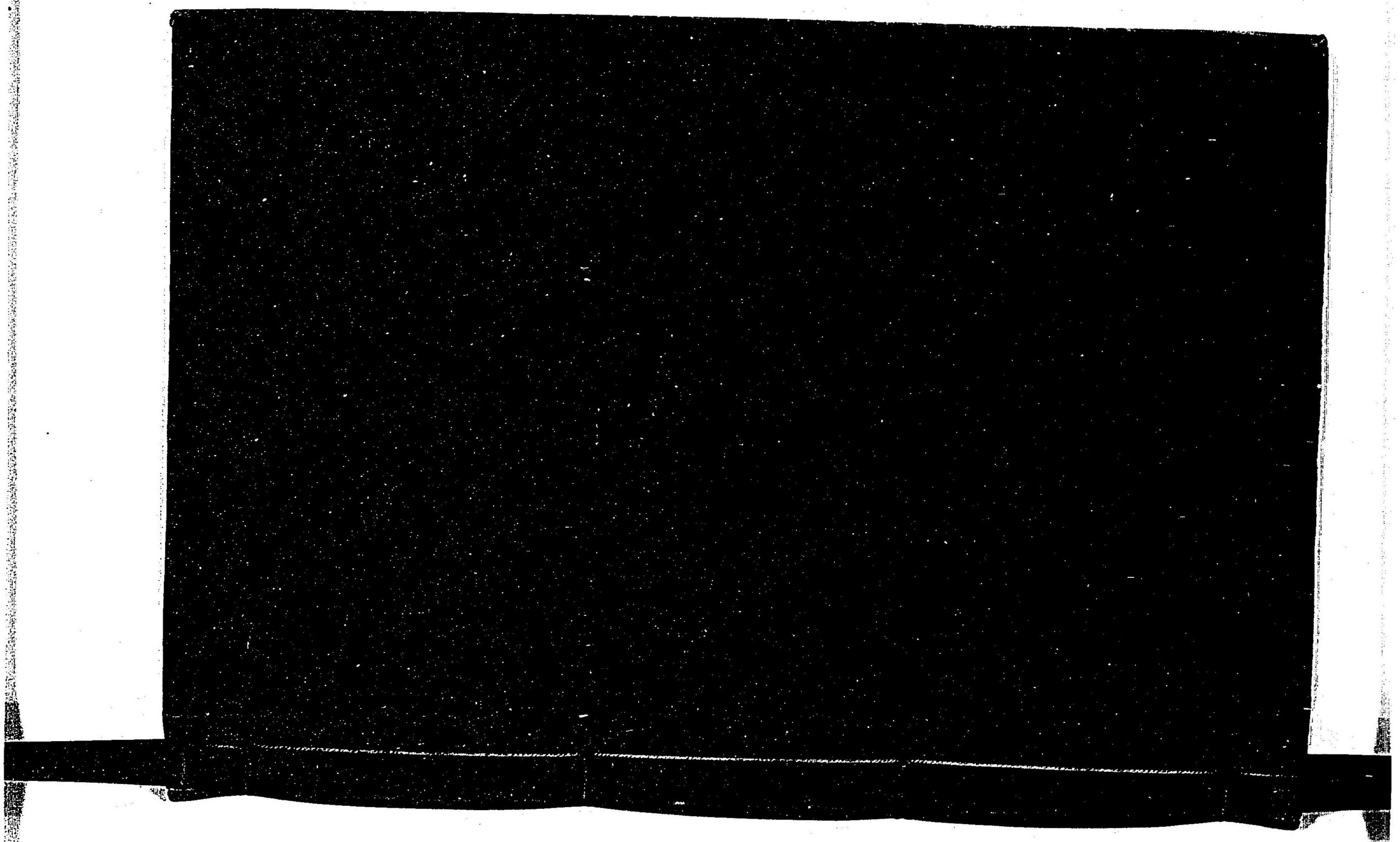
皇明應三年八月廿三日小山城國山埼西南水无
瀬殿ある御廟小神號を奉賜へる宣命よ近曾與
利張戎起氏黎民困免利當歳尓波天曜變志氏地
祇動勢利水涸氏旱甚大尓火熾尓之テ氏災或興留。
爰尓元弘建武與利以來聖怨滿世氏亂國之給止。
有記文尓依氏四海不艾須云々。今有所思氏以坐
所號氏水无瀬神止申佐牟波可宣云々と有小心
を潭めて思ひ辨ふぢくおむいれ御廟の神靈ど
もハ玄道も彼地小故あひて年まねく往のひて。

親く聞もとる事のあれどそれ別小記奉るべけ
れバ今ハ省きつゝさて因小それ御子二柱天皇の。
御陵等の事をも聊記出てむ土御門天皇の御陵
ハ。阿波國小在るを。前皇廟陵記小或ハ曰板野郡土
佐泊里浦撫養村有土御門院陵平地積石相傳帝自土
佐泊といひ山陵志小も有村落有石塔土人無知誰墓
佐遷阿波宿此地故稱土
老齋於其前以テ通夜焉古來以テ然矣十月十一日父
是土御門之御忌と記せるハ玄道も普時
詣奉しかハ實よ此の說の如くおりけむ。其國人安
藝某の記せる物小ハ天皇を板野郡ある。大谷山
の下小葬奉れる故いつの御代小や有けむ。詔有

て。山陵を捜索せ賜ふ事の有ㇾしのど。土人どめ。そ㆑煩勞を厭ひて。深く祕奉ㇾて。御祠ある㆑も。鼠神祠とぞ改め申しけるを。數十年の後ふ。或者馬ふ乘かゞら。御前を過ㇾるにやゞて死ㇾけㇾ。又一鄕ふ。疫病水旱の災かど洊ふ有りて。皆おれを驚怪ㇾて。日者ふ託みて。此を卜あてるに。天皇ㇾ御崇かれゞ。急ふ御靈を爽塙る地ふ移ㇾ奉ㇾば。ト㆑の由。卜㆑の山頂を擇て。祀奉ㇾしをり。其災忽ふ止ゐㇾとぞ。此も漢文かㇾしを。今も約めて引とめ。はゞ順德院天皇の御事も。佐渡風土記ふ。仁治三年九月十二日ふ。御壽四十六ふて。崩御からせ給ひける。皇居を跡ばのり殘ㇾて。驗の松あㇾき。御休所をこゝ芝山あㇾ。一間餘ㇾふ。二間許の靈しも石ありふ。此邊を穢ㇾ者も。必祟りㇾ受く云々。御遺勅ふ因ㇾて。御尊骸を。眞野山ふ納め。御廟を南ふ向け奉ㇾし㆑も。都おひしと宣ひしふ因とㇾ。後世のもるしふとて。松を植たるに。其枝四方へ垂て土ふつく。取別て南ふちを枝いと長く弘ぶり。木め亦年毎

小南へ傾けゐ。ぬきて世の後まで。都の方を戀(レヌ)だせ給ふ御心顯れて。このハをゐ見奉(ヱ)るとめ見も。北國巡杖記ゐ天皇御船中ゐて。「いのべして。此二タもじを。幷ゐけむ土佐をこの才して。佐渡へ舟行く。」ちて眞野里ゐ皇居をまおらひ奉るゐ子規のあはと鳴ける坡聞とびうと過てゐかへぎを」と遊だしをるとり聲をまと止けるとぞ。又「思ひきや雲の上をだにそゐ見て。眞野の入江ゐ朽なむとは」復陵を。圀分寺の末。眞輪寺守ゐて。今は現然さめとあゐ。或物ゐ子規のを。讃岐院天皇の御製とし。又或を良純法親王の御歌とせゐ。何レう是からむ。山陵志はも。在リ佐渡雜太郡之眞野山ニ至テ於レ今奉テ陵ニ寢之記ヲ不ニ敢テ弛廢ヲ云といへゐ。件の天皇等御上を。世ゐ聞えちせむかとれく。いとあをれのみのふみとなれるおとは。懽かろしくうれき心のそばかきをむゐかゐ陵墓の變異を。師説の如く。和漢の故事どもを。數ヲも盡さられねバ。今そゆ一ッ二ッを擧つるかり。ちれど安閑天皇。天武天皇等(タチ)ゐ山陵(ミサヾキ)の如く。恐(カシコ)くめ犯レ奉れる。狂賊(タヾアレ)らごの有ッても。ちしめ嚴威(イヅ)を顯(アラハ)し賜へゐをも聞えぬを。早く御心(ミコヽロ)ゐ良(フサ)をしのらぬ由あゐて。他所(コトトコ)へ遷幸(ウツリイデマ)をい。故ゐてぞ有ルばな。此を尼人(タヾビト)の或ル大神の神語の。も。全じ事ぞ。是を以てかれ天皇祖神をり錫(タヽ)はれる。我人の靈魂(タマ)を。天地と常(トコ)久ゐ窮(ツク)盡るおとなかきもちぞ。を誨(サト)ちれとゐ說(コト)の。

確乎(タレカ)かるをも。覺(サト)悟(ト)ほ遐く奈年。

夜曾迺久萬泥二之巻終

111
2
84